

回転式鋸頭の系統分類

——佐藤達夫の業績に基づいて——

安 齋 正 人

1

佐藤達夫は1925（大正14）年5月12日に生まれ、1977（昭和52）年4月7日に他界した。ちょうど昭和の年数とともに齢を重ねたが、しかし昭和の終焉を10年余も残した、享年51歳の早過ぎる死であった。

佐藤の死から20年を数えようとする今日、佐藤の考古学的業績についてよく知らない、あるいはその名前さえまったく知らない若い研究者が増えているのではないかと危惧している。私と同世代の勅使河原彰の最近の著作『日本考古学史』中にも、佐藤の名前は見当たらない。だが、勅使河原の目に佐藤の存在が映らなかつたことが問題なのではない。勅使河原自身が記述するところでは、「戦前までの日本考古学史を叙述した和島誠一の『日本考古学の発達と科学的精神』（『唯物論研究』60・62号、1937年）、戦中・戦後初期の日本考古学史を叙述した近藤義郎の『戦後日本考古学の反省と課題』（『日本考古学の諸問題』1964年）こそは、学史の本質を私たちに提示するものであって、本書もこれらの論文に学んだものである¹⁾ということであるが、その党派性のはっきりした、今日ではある意味で硬直化した学史観とその叙述法に問題があるのではないかと、思われるのである。

ところが他方では、日本考古学史をひとつの研究分野に体系化した、しかも佐藤の良き理解者と思われた齋藤忠においてさえ、佐藤への言及は少ない。佐藤の具体的業績としては、1974年の『日本考古学史』中の旧石器時代の新しい研究動向を叙述する場面で、戸沢充則の1967年の学位論文「先土器時代文化の構造」と、大井晴男の1968年の「日本の先土器時代の石器群の系統について」とともに、佐藤の1969年の「ナイフ形石器の編年的一考察」を挙げているに過ぎない²⁾。その後を上梓された『日本考古学史辞典』での佐藤の業績の項では、次のような抽象的な記載に終始している。つまり「特に旧石器時代・新石器時代の研究に意欲を示し、早くから国内の関係遺跡を発掘し、その報告書にもすぐれた研究の成果を示したが、イラン・イラク遺跡の発掘等にも参加し、西アジア方面の石器時代研究にも貢献した。日本の旧石器時代の研究は、この頃ようやく端緒の開かれたものであったが、世界的な巨視的な見地に立って意見を発表し、その学問的な師である山内清男とともに日本の学界に清新な刺激をあたえた。縄文土器の編年にも、緻密な研究をなした³⁾」と。その翌年の著書『考古学史の人びと』にも佐藤の名を挙げているものの、内容は大同小異、好意的な

記述であるが文章内容は簡潔である⁴⁾。

そのようなわけで、佐藤の業績を再評価し、その今日的意味を再発見しようというのが本稿のねらいである。

2

佐藤達夫が生まれた1925年前後は、日本考古学の変革期に当たり、基礎的研究基盤としての今日の伝統が形成されつつあった時期である。とりわけ佐藤が後年師事する山内清男が、その前年に東北大学医学部解剖学教室に赴任して、この年の岩手県大洞貝塚の発掘を手始めとして、仙台に過ごした10年間に精力的な発掘を行い、同時に同年の「石器時代にも稲あり」など先見性の高い論考を次々に発表していた時期である。「日本先史考古学の基礎と輪郭は、まさにこの時代に成就されている」⁵⁾。

佐藤は浦和高等学校を卒業後、1945年4月に東京帝国大学文学部東洋史学科へ入学した。私の誕生した年である。東洋史学科で大陸の仏像の研究をやりたかったらしい。だが、同月兵役に服さねばならなかった。敗戦にともない9月に復学し、さらに1947年に考古学科に転科した。考古学科は前年に専修の学生をとるようになったばかりで、佐藤は同じく東洋史学科から転科した田中一郎とともに第二期生ということになる。当時の研究室関係者は、助教授駒井和愛、講師杉勇、助手関野雄に、第一期生の井口大介と中川成夫で構成されていた。ただし、東洋史学科関係者の研究室への出入りが頻繁であった。

当時を知る術が少なくなってきたが、佐藤とともに駒井の講義を最前列で聴いていた田中は、次のような講義を受けたことを書き残している⁶⁾。

駒井先生 隋唐文化とその波及

駒井先生 考古学概論

駒井先生 考古学演習 Petrie, Prehistoric Egypt

八幡先生 日本考古学

杉 先生 西南アジア考古学

多田先生 地学概論 理学部講座

多田先生 地方地誌 理学部講座

木内先生 人文地誌 理学部講座

山内先生 先史学 理学部講座

田中の手記からは、佐藤が山内の講義を当時聴いていたかどうかはわからない⁷⁾。

3

考古学科に移った次の年、すなわち1948年に佐藤達夫は、日本考古学協会登呂遺跡調査特別委員会による静岡市登呂遺跡と、モヨロ調査団による網走市モヨロ貝塚のそれぞれ第二回目の発掘調査

に初めて参加し、翌年には同じく考古学研究室による鹿児島県大隅半島及び大口盆地調査と、河野広道による知床半島調査に参加している⁸⁾。「終戦と共に国史の真の姿が究明せられるようになり、国のあゆみの曙も神話的解釈から科学的検索に移るようになった。そして曖昧な地上の文献よりも確実な地下の文献を求めようとする声がかんになってきた。こうして最初にとりあげられた問題は、南に於ける静岡の登呂遺跡の発掘と、北に於けるモヨロ貝塚の発掘であった」⁹⁾。

1946年の夏ころから東亜考古学会幹事島村孝三郎を中心にして発掘調査の計画が立てられていた北海道網走市モヨロ貝塚は、史跡指定の一部が解除されたのを契機に1947年、東京大学と北海道大学の研究者たちによって調査された。調査団長学士院会員原田淑人のもとに、東大側は文学部助教授駒井和愛、東京女子大講師小林知生、理学部嘱託中島寿雄、同大学院特別研究生生田義一、他学生2人、北大側は児玉作左衛門を首班として、医学部助教授伊藤昌一、医学専門部助教授大場利夫、北大博物館主事名取武光、医学部助手松野正彦、他学生6名という陣容に、文部省からは史跡調査官斎藤忠、また網走の北見郷土博物館長米村喜男衛が参加した¹⁰⁾。「最初の年も、翌年も秋の三週間ばかりを費し、文部省の斎藤忠君と三者の完全な協力のもとに遂げられたのであったが、大体に於いて言えば米村さんの助言を得て、東京大学側と、河野博士、名取助教授などが堅穴の調査に専らになり、北海道大学の児玉、伊藤両博士らが墳墓の発掘に当られたのであった」¹¹⁾。なお、この「モヨロ調査団」による調査については、児玉作左衛門(『モヨロ貝塚』)、名取武光(『モヨロ遺跡と考古学』)、米村喜男衛(『モヨロ貝塚資料集』)がそれぞれの著作で個別に言及しているが、1964年になって、東京大学文学部から刊行された『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻中に、1951年に実施された補足調査とあわせて、「別篇」として報告されている¹²⁾。

モヨロ貝塚の主体は「オホーツク式文化」期にあたる。この「オホーツク式文化」という呼び名は、河野広道が「オホーツク式土器」という新しい名称を与えた一群の土器について、1933年の『人類学雑誌』と『北海道原始文化聚英』で解説をおこなったことに始まる¹³⁾。戦後間もない発掘当時においては、「モヨロ遺跡の主に漁撈関係の骨角器と少数の石器とには、遠く北太平洋のアリューシャン列島やカムチャッカに共通のものがあって、この方面との文化の交流を物語っており」、「北千島においては、アリュートやエスキモーの風習である、ラレットと呼ぶ一種の口唇具が数例発見されており、また北方民族の石ランプも出て」¹⁴⁾ いるので、「オホーツク式文化」は遠く旧大陸や北太平洋にまで連絡をもっていた、と考えられていた¹⁵⁾。さらに人類学の方面でも、その当時までモヨロ貝塚から発掘されていた人骨は約180体分知られており、計測に役立つくらいに保存のよい成年男子の頭蓋骨が約40個を数えた。そのうちの約20個がアリュートに似ている「アリュート型」、残りの大部分はアリュートとアイヌの混血した特徴が見られる「混合型」で、わずかにアイヌの特徴をもつ「アイヌ型」が混じっている、と児玉作左衛門によって報告されていた¹⁶⁾。

ところで「オホーツク式文化」は、鉄製の「蕨手大刀」や青銅製・錫製の鈴のような金属器も組成しているのであるが、そのような「外から渡来した文化」の考古学上の意味については、実年代を教えてくれることにあると考えるのが当時一般的であって、交差年代法にとって重要な資料で

あった。名取武光も、「一番有難いことは、例えば蕨手大刀が、奈良平安朝時代に、極く短い間使われていた大刀で、それがモヨロ貝塚から土器や石器と一しょに出ることが判れば、モヨロ貝塚の堆積された年代は、約千年前後昔であろうという見とおしがつく」¹⁷⁾、と説明している。

一般に最初に参加した発掘調査の体験が研究テーマの選択に影響することが多い。佐藤も同様であつたらしく、また南の弥生文化よりは北のオホーツク文化へ関心を寄せ、1950年に学部卒業論文として「オホーツク式文化私考」を提出した。現在、その内容を知る術はないが、オホーツク文化はある意味において土器や石器よりも骨角器がその特徴をよく表しているから、佐藤は骨角器に「北方諸文化比較研究」の手がかりを見いだしたのかもしれない。また、駒井和愛の研究歴に見るように、戦前の満蒙考古学の成果と一体となったオホーツク文化の研究が、それまであまり触れられなかったオホーツク文化の起源の問題、特に大陸からの渡來說を生んでいた時代的背景も無視できない。

1953年には「オホーツク文化の裁縫」¹⁸⁾、1964年にも「オホーツク遺物の特色」と「附・モヨロ貝塚の縄文、続縄文及び擦文土器について」¹⁹⁾と題する小論を発表している。発表年の遅い後者についてはいずれ触れるとして、前者について簡単に触れておく。非常にユニークな遺物の用途論である。用途の類推に土俗学的方法も援用しているが、佐藤が「機能的な方法」と呼ぶ「一連の仕事に参与する種々の道具の複合状態を推察する」という手段を採っている。「機能的な方法」とはすなわち、毛皮・皮革・羽毛などオホーツク文化人の衣服に関連する裁縫用具として、従来知られている骨製の針と針筒以外に、裁断用と考えられる石製ナイフ、骨製のへらと錐、革製のゆびぬきと骨製のゆびぬき留め²⁰⁾と考えられる遺物を取り上げて、相関的に考察することである。オホーツク式土器の刻紋や型紋は白樺樹皮製容器の縫い目の模倣であるという河野広道説に触発されて集成した、オホーツク式土器の紋様類型の系列に「オホーツク文化人の裁縫における運針」を推察しているところなど、佐藤の考古学の研究法ばかりでなく、佐藤の思考法や人柄もにじみ出ていて、懐かしく思い出される。

それはさておき、卒業論文提出後の4月に、佐藤は特別研究奨励学生として大学院に入学した。その年の夏、友人の宇都木章が勤務する埼玉県立飯能高等学校の学生であった渡辺兼庸らが調査した、縄文時代中期の埼玉県蘆刈場堂ノ根遺跡の発掘と出土遺物の整理を手伝ったことが、縄文土器との最初の出会いであろう。この時出土した加曾利E式土器が東京大学考古学研究室に寄贈されている²¹⁾。

4

佐藤論文の輪郭

卒業論文に次ぐ佐藤達夫の研究論文は、東京大学文学部大学院特別研究奨励学生前期論文として、1953年に提出された「我が国に於ける回転式銚頭について」である。これは1983年出版の『東アジアの先史文化と日本』（六興出版）に収録されるまで、日の目をみなかった論文である。回転式銚

頭についての最初の体系的論考にもかかわらず、公表されて以後も当論文に本格的に言及する研究者がいない、忘れ去られた論文であった。当論文の梗概とも言える同名の小文²²⁾が前年の『弥生』1に掲載されていたが、『弥生』は研究室内の同人誌であり²³⁾、この文章も1978年出版の『日本の先史文化』(河出書房新社)に収録されるまで、研究室関係者以外の目に留まることはなかったと思われる。

佐藤は「我が国に於ける回転式銚頭について」に先立って、1952年に「セント・ローレンス島出土の銚について」²⁴⁾を発表していた。この小論の準備段階で銚に関する内外の文献的検索を十分にっていたことがわかる佳品である。『古代学』第1巻第4号に掲載されていたので、馬目順一の目に留まった。馬目は、「佐藤達夫も閉窩式銚を含む離頭性刺器を詳述、その中で、有茎式銚と開・閉窩式銚との間には根本的な構造差があり、燕形銚の祖形として長谷部が唱った扁平有孔の有茎式銚説を正面から否定した」²⁵⁾、と述べて、燕形銚頭に関する佐藤の系統観に特に注目した。

はるかに体系的な論文である「我が国に於ける回転式銚頭について」の方は、出版年度からいって渡辺誠の著書²⁶⁾から抜け落ちたのは致し方ないことであった。しかし幸いにも、金子浩昌・忍沢成視による骨角器の集成的著書で取り上げられ、その結論部の「戦後骨角器研究の成果と問題点」中で、基本的文献の最初のものとしての評価を得た²⁷⁾。ただし、佐藤の基本分類が、「長谷部言人、山内清男氏による分類の基本が整理されたものといえよう」という評価は、山内といまだ親交の少ない時期の論文だけに、穿ち過ぎであろう。むしろ馬場脩らの戦前の成果に多くを負いながらも、卒業論文以来の佐藤独自の研鑽の賜物であったと言えよう。それ以上にこの要約が問題であるのは、佐藤の分類について、「型式Ⅰが開窩式、Ⅱが閉窩式銚頭」と記していることである。これは明らかに誤読の結果で、後に述べるように佐藤の分類法は独特なものである。

さて、話を佐藤論文の内容に戻し、細かに検討してみよう。

近代考古学における文化及び文化要素の起源論について言えば、一般に、複雑なものは文化の中心地で発見・発明され、周縁に伝播したと見る「一元論」と、条件が整えば複数の地域で同じようなものが発見・発明されると見なす「多元論」の対立があった。回転式銚頭については、複雑で特異な機構から、世界各地の銚頭はすべて何らかの近縁関係にあるものと、漠然と考えられてきた。佐藤自身の関心も、「何等かの近縁関係が、どの程度の発生的関係を含み、どの程度相関関係によるものであるかを」²⁸⁾、探ることにあったのである。

この問題設定に対する佐藤の結論を先取りして簡潔に述べれば、次のようになる。すなわち、汎世界的視野にたって見渡せば、回転式銚頭の分布には二つの相異なる系統がある。つまり、アルプス湖沼地帯やヴォルガ川低地帯に発する、鹿角を素材とする魚類を対象とした南方型と、北欧沿岸地帯に発する、海獣の骨及び牙を素材とする海獣を対象とする北方型とである。そして、わが国における回転式銚頭についても、次のように記述している。「形式的には第Ⅰ群、第Ⅱ群として表現し得る二つの相異なる系統が存することは、ほぼ明らかであるように思われる。前者は縄文式文化前期に発し、末期に盛行、本州東北半と北海道南半に亘る地域に分布し、一はアイヌにより、一は

日本人によって極く近代に至る迄漁獲に利用された。

同群（第Ⅰ群……筆者註）中の一型式は、縄文式文化中期に発し、オホーツク式文化期に盛行、やや変形してアイヌの鏃として伝えられた。後者（第Ⅱ群……筆者註）はオホーツク式文化に発し、プロト・アイヌ期及びアイヌ期に亘って盛行、前者の北辺に分布した。（……）これら二系統の銚頭を型式、用途、分布を条件として、南方型、北方型と表現することも可能であろう²⁹。要するに、わが国において看取される相異なる二系統の存在は、世界各地域においてほぼ同様に現れるところの一般的様相でもあった、という系統観である。

戦前から北方諸文化の比較研究に関心を抱くものは、W・ヨヘルソンの二著、すなわち『アリューシャン列島の考古学的研究』（1925）と『カムチャッカの考古学的研究』（1928）をテキストとしていた。同様に、「我が国に於ける回転式銚頭について」の執筆前に佐藤は、北方諸文化比較研究に関する当時最新の二著、すなわち1944年のノルウェーの考古学者G・イエスィングの『環北極の石器時代』と、1946年のフランスの民族学者A・ルロワ＝グーランの『北太平洋の考古学—アジアとアメリカの沿岸住民の相関研究のための資料—』と題する、「基本的には民族学的な二つの考古学的労作」に接することができた。前者は「環北極海文化圏」を、後者は「北太平洋文化圏」を設定して、それぞれに日本を組み入れていた。しかし、そこでの「櫛目文土器」や「回転式銚頭」などの扱いは恣意的だ、と佐藤は判断した。そこで、「かかる現象的理解を離れ、発生的、相関的により詳細な検討」を加えようとしたわけである³⁰。

いま、東京大学考古学研究室所蔵のルロワ＝グーランの著作³¹を繙いてみると、マルセル・モースの直弟子で後にフランス人類学の代表者の一人となったルロワ＝グーランの、考古学と物質文化研究の深い結びつきを示した古典的研究であると評価されたものだけに、当時の、いや現在の日本人研究者にもほとんど見当たらない広く体系的な視野を感じさせる。銚についても325頁から412頁まで80頁以上が費やされており、細かな分類案も提示されている。まさに「労作」である。ただし、民族資料と考古資料とが渾然一体として扱われており、ルロワ＝グーランの考古遺物の民族学的処理法を、佐藤が「現象的理解」と明断したのも頷ける。とりわけ日本の考古資料の処理の仕方には、佐藤ならずとも日本の考古学者であれば誰でも不満を覚えたことであろう。しかしながら要は、そうしたアプローチ法の異なる洋書に接した際に、どのような研究姿勢で対応するかということである。短所を誇張して予断的に拒絶してしまうのではなく、佐藤は批判的に乗り越えようとしたようである。

佐藤達夫の考古学研究法は一種独特なものであった。私は佐藤の遺物観察法を「系統的個体識別法」と呼んでいる。それを特徴づける方法・表現が、「我が国に於ける回転式銚頭について」にすでにいくつかそれと認められる。だが、ここで特に注目したいのは、回転式銚頭の系統論と北方諸文化の比較研究法である。考古学における系統論的比較法はもちろん佐藤より始まったわけではない。しかし系統論に基づいた諸文化の比較考察を方法的に多用した研究者としては、やはり佐藤の名を挙げないわけにはいかない。佐藤の比較の方法は、この実質的に最初の本格的論文に、すでに

顕著に表れていることに注意を促しておきたい。

考古学の比較の方法には具体的に二種類ある。第一のタイプは、ある遺物あるいは遺構において類似性が見られるが、その考古資料を生み出した諸社会が時間的にも空間的にも著しく隔たっているため、明らかに相互の影響関係によっても、あるいはいかなる意味の起源の共通性によっても、その類似性が説明され得ないような考古資料が対象として選ばれる場合である。この場合は、地球上のあらゆる社会から収集された証拠を比較することによって、考古資料の一般的傾向を析出しようとするものである。佐藤は例えば、「松島湾沿岸から僅々数例が知られているにすぎない」縄紋時代前期の円錐形の銚頭の「機能」と「発生由因」の考察には、この方法を使っている³²⁾。ただし、佐藤はこの方法を系統関係を求めるためにも使った。そのはしりは「セント・ローレンス島出土の銚について」で、エスキモーにおける回転式銚頭の系統問題に関して応用したものである³³⁾。

第二のタイプは、隣接していると同時に同時代のものであり、相互にたえず影響を与えあっており、発展の過程において、まさにその近接性と同時性の故に、同一の大きな原因の作用に支配されていた諸社会が生み出す、少なくとも部分的には共通の起源に遡り得る考古資料を並行的に研究する場合である。

この二つのタイプ³⁴⁾を比較する時、考古学においては後者が学問的により実り豊かなものであったし、佐藤の考古学的業績においてもそうであった。

回転式銚頭の名称

戦前、長谷部言人、八幡一郎、馬場脩、大山柏、清野謙次らの先験的な仕事があったにもかかわらず、「銚とは離頭有紐利器」という概念が当時必ずしも一定していなかった。

馬場によれば、銚は「アゲ引き法による銚」と「キテ式引き寄せ法による銚」の2種として認識されていた³⁵⁾。佐藤の論文は後者、すなわち回転式銚頭を対象にしたわが国最初の本格的論考であったと言えよう。回転式銚頭各部の名称については今日でも統一されていないので、本稿では佐藤の名称を踏襲することにする(図1)。

回転式銚頭の種類

佐藤達夫の回転式銚頭の型式分類は独特のものであるだけにわかりにくい。若干の説明を加えておく。分類の基本はすでに「セント・ローレンス島出土の銚について」で述べられていたが、より細分化されている。

佐藤の主旨が回転式銚頭の二系統を論証することにあつたことは先に述べた通りである。そのために、以前の開窩式・閉窩式の二分法を避け、まず形態上二つのグループ、すなわち長円錐形か半截長円錐形を基本形態とする第Ⅰ群と、平板状を基本形態とする第Ⅱ群とに大別した。佐藤が形態に注目したのは、第Ⅰ群が鹿角を素材として縄紋文化期及びそれ以降に現れたのに対して、第Ⅱ群としたものは、多くが海獣の骨や牙を素材としてオホーツク文化期及びそれ以降に現れており、

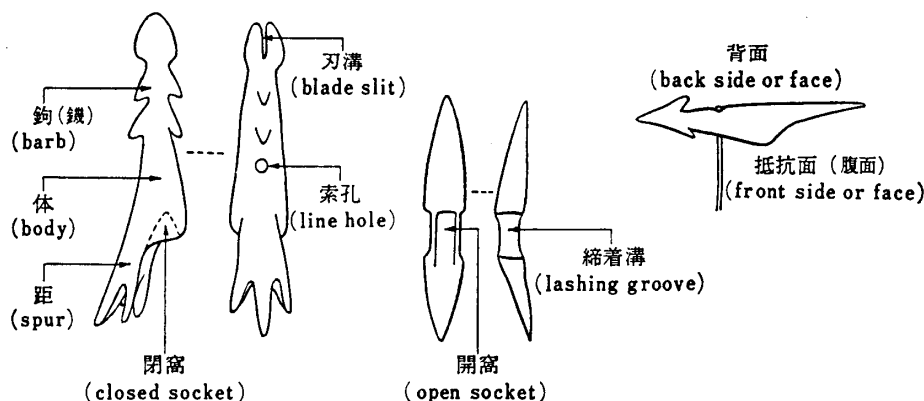


図1 回轉式銛頭各部の名称 (佐藤論文から転載)

「これらの相異なる素材選択は両者の相異なる生活様式によると」考えたからである³⁶⁾。第I群に開窩式と閉窩式が含まれているので、開窩式・閉窩式の二分法では系統差が表れないということであろう。

第I群をさらに半截長円錐形を基本形態とする型式Iと長円錐形を基本形態とする型式IIとに、また第II群を抵抗面の選び方によって、狭薄な形態を基本とする型式IIIと扁平な形態を基本とする型式IVとに二分した。この型式IIIとIVとの区分が特に佐藤分類の理解をむずかしくしている。この点については後にもう一度言及する。

次いで、索孔の方向（抵抗面に対し直角か平行か）と、尖頭部に嵌挿する鏃の有無と鏃の方向（抵抗面に対し直角か平行か）を基準にして細分し、最後に当然開窩を有する型式Iを除き、基本的に閉窩である型式II～IVの中から開窩の特例を抽出する方法である。この例外的特殊例(x)を設けたのは、それが系統の指標として意味があると考えたからで、形態→索孔→鏃の嵌挿→特例（開窩）の段階的分類基準に基づいた大別・細別法である（図2）。

佐藤の分類案は回轉式銛頭を初めて組織的に分類したものであって、索孔の方向や鏃の方向など、その後の分類にも用いられる分類基準の導入に注目すべき点があるものの、読み始めにはいささか煩雑な感は否めない。それは第一の基準として恣意的になりやすい形態と抵抗面を選択したことに起因している。しかし論文を読み進むにつれ、佐藤の意図が鮮明になってくる。「セント・ローレンス島出土の銛について」では有茎式・開窩式・閉窩式を第一の基準としておりながら、そうした整合的な分類法を犠牲にしてまで³⁷⁾、系統を追求するために形態にこだわったところに、更にまた、特殊例(x)を設けたところに、後年の「ナイフ形石器の編年的一考察」や「土器型式の実態一五領ヶ台式と勝坂式の間一」での個体識別法に通じる、佐藤独自の的方法論の萌芽が認められる。

5

さて、次に各説を順次検討していくが、本論は佐藤達夫の諸見解の当否を判定するのが本旨ではない。当時のきわめて数の限定された資料をどのような視点からどう扱ってどんな結論を導き出し

回転式鋇頭の系統分類——佐藤達夫の業績に基づいて——

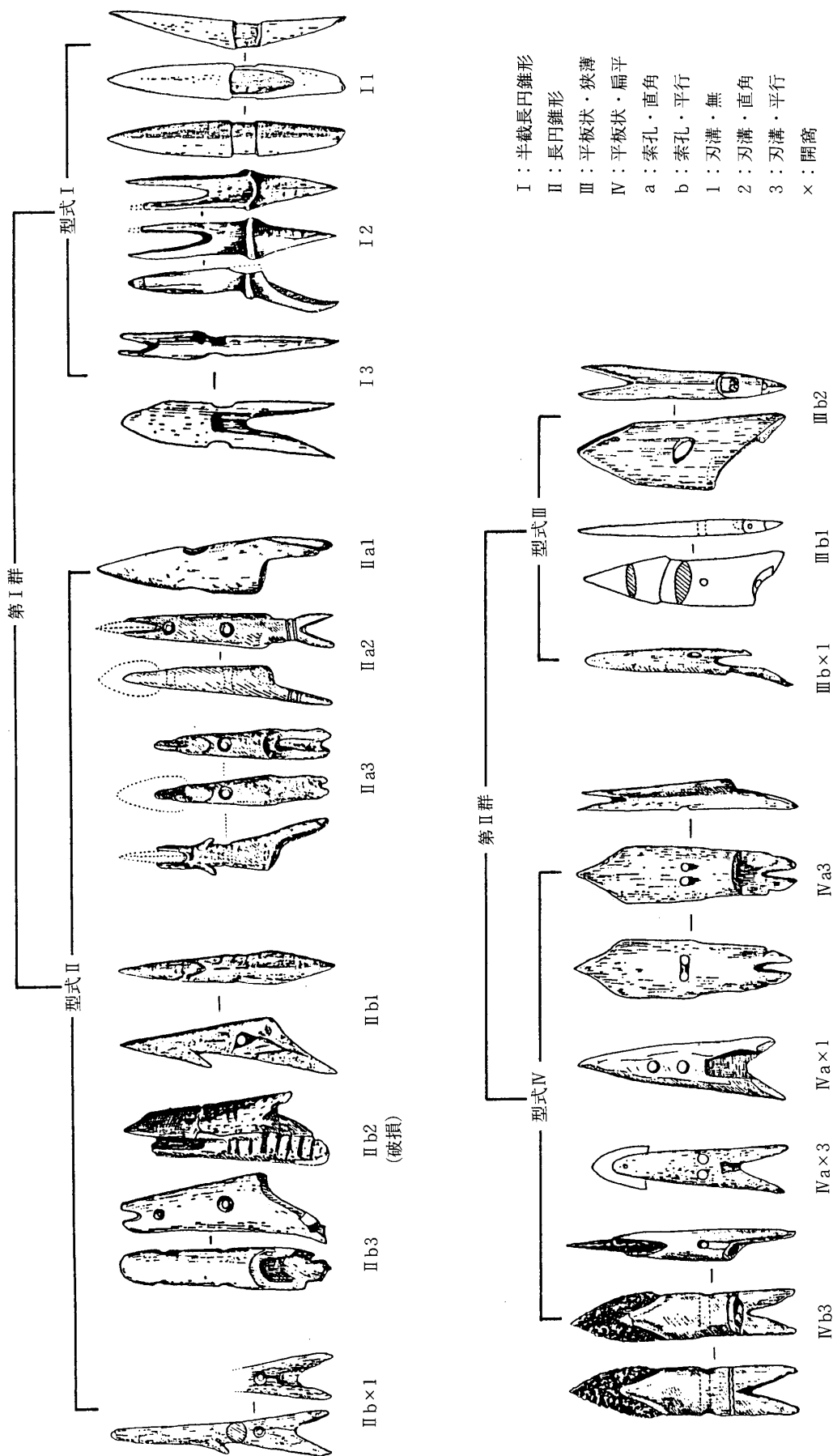


図2 回転式鋇頭の佐藤分類 (佐藤論文による)

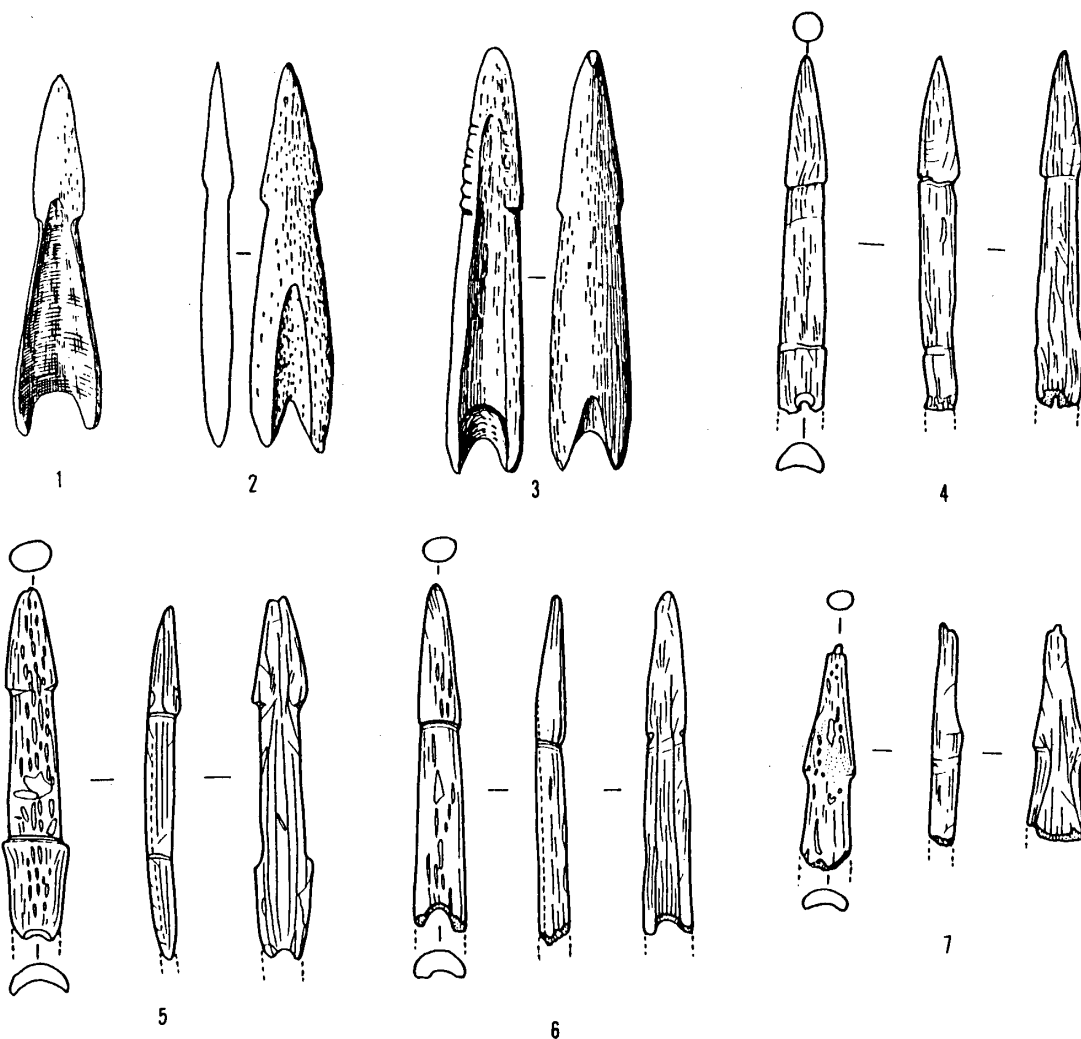


図3 縄紋文化早・前期(型式I1) % 1. 青森県中居貝塚 2,3. 同-王寺 4-7. 同長七谷地貝塚

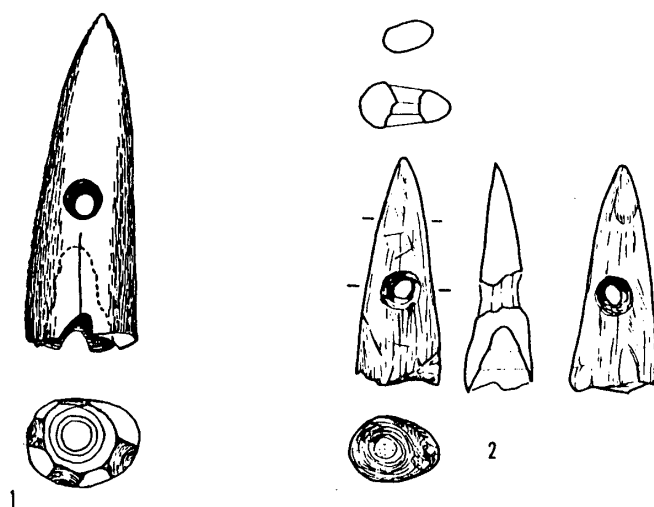


図4 縄紋文化前期(型式IIb1) %
1. 宮城県大木囲貝塚 2. 同土浮貝塚

ているのか、当時の佐藤の視点に注目しながら、後年の佐藤を特徴づけた考古遺物の見方、考古遺物間の関係の捉え方、要は佐藤考古学の原点を行間に探り、その今日的展開を図ってみるのが目的である。

各説は「縄文式文化期」と「縄文式文化期以降」に分けられ、さらに各時期ごとに記述されている。

1. 縄紋文化期

縄紋文化早・前・中期

佐藤達夫が論文を準備していた1950年代初めには、縄紋前期の銚頭は松島湾沿岸から型式Ⅱ(?)が数例知られていたにすぎなかった。けれども、縄紋前期には漁撈がすでに重要な生業であったことを考慮すれば、「縄文式文化初期」³⁸⁾の銚頭がまだ見つかってはいないけれど、その時期(すなわち早期)に前期における銚頭の出現はすでに準備されていた、という予測で書き出されている³⁹⁾。ちなみに、佐藤が二本柳正一とともに1953、54年に予備調査を行い、1955年に発掘調査を行った青森県六ヶ所村唐貝地貝塚の第3貝層(早期末)から、「形態はほぼ中居の円筒下層式にともなうものに等しい」⁴⁰⁾銚頭が出土していた。青森県中居貝塚出土の型式Ⅰの銚頭(図3-1)を論文では「縄文式文化中期」としていたのを、後年草稿に「縄文式文化前期」と書き込んでいた背景に、この発掘資料が与っていたのかもしれない。学史的に重要な資料と思われるが、現在行方がわからない。

前期の銚頭の例として山内清男の資料が図示されている(図4-1)。本例は特異な形態をみせるが、アルプス湖沼地帯とエスキモーの間にもみることのできる類品から、佐藤は一種の銚頭であるという卓見を述べていた。ただし、年代からみてエスキモーの銚頭とは別の「発生由因」を考慮すべきだと言いつけてもいる。佐藤の「南方型」と「北方型」の二系統論からは当然の言及である。この長円錐形銚頭の四個の刻み目によって分かれた小突起を、距の原初形態とみなしたこと、さらに索孔は「本輪西上層式」(すなわち縄紋)期及び弥生文化期の銚頭と同様、抵抗面に並行していると判断したことに、佐藤らしい観察力が見てとれる。そしてその特色つまり索孔の位置の違いから前期と後期との間と、「末期」と「本輪西上層式期」及び弥生文化期との間に、ヒアッスが存するとみなしていた⁴¹⁾。

論文執筆当時、佐藤が利用できた「縄文中期」の例(図3-2, 3)は8例(中期とした青森県一王寺出土の7点と中居貝塚の1点は先述のように後年前期と加筆訂正)⁴²⁾にすぎなかった。そこでいかなる結論も引き出すわけにゆかないと断りながらも、すべてが縦に半截した鹿角枝を材料とすることが顕著な特色だとしている。また、これら型式Ⅰの例が、前期及び「末期」の長円錐形(型式Ⅱ)との間の系統的差異は的確には判断しがたいとしながらも、型式Ⅱに北接する分布であることに注目していたようである。そしてこの「型式Ⅰの伝統は末期をヒアッスとして本輪西上層式期及びオホーック文化期に継承されるらしい」、という的確な見通しを立てていた。

縄紋文化後・晩期

後期の銚頭（図5-1）は3例挙げられているにすぎない。そのうちの岩手県女神洞窟出土の例（図8-4）を後年土師器期と加筆訂正していた⁴³⁾。

縄紋時代晩期の回転式銚頭は松島湾沿岸から岩手県南部海岸にわたる地域に集中的に分布する、いわゆる「燕形銚頭」⁴⁴⁾に代表される。佐藤はこの一群を一応「末期」に属させるが、同期を中心とするという程度の意味であるとして書き、時期幅に含みをもたせるとともに、福島県小川貝塚や千葉県余山貝塚発見例にも触れている⁴⁵⁾。すべてが「型式Ⅱa」、すなわち長円錐形で索孔が背腹面に通じているのが最も著しい特色であるとみなしている。先端に鏃を挿まず尖頭形のもの（図6-1～6）が大部分で、鏃を挿む場合は背腹面に直交（同-7～10）しており、並行するもの（同-11）は例外的に1例にすぎないことを、数字を挙げて説明している⁴⁶⁾。

次に緻密な個体観察から製作技術を推測している。こうした製作技術への関心は、東京大学東洋文化研究所助手論文「東亜細石器文化に関する諸問題」（未発表、『東アジアの先史文化と日本』に収録）を中核とする初期の石器研究にも見られるのであるが、佐藤考古学から見落とされてきた側面である。

鹿角の切截とそれに続く距の作出、および最後の仕上げには「砂岩質の砥石による擦截」を多用し、「硅質の刃による切断」も援用しており、途中の穿孔にはある種の錐、例えば山内から聴いた「堅緻な木質」と砂あるいは「管骨製の錐」と砂のようなものを想定しながらも、錐の材質と種類はわからないとしている。穿孔器具の推測に対する慎重な態度に比べ、切截器具の同定は対照的に断定的である。そこで、「硅質の刃」とする根拠が明示されていないのが惜しまれる⁴⁷⁾。

佐藤が観察した大洞貝塚C地点出土の28点中完形品はわずかに4点で、未製品2点を除く残りの22点は破損品であった。破損部の内訳は、索孔の部分が11例、距の欠損が5例、ソケットの部分が6例で、使用に際して銚頭が受ける抵抗が大きかったことを示している。そうしてみると、先に註44で言及したように、渡辺誠が南境型（有茎式）から燕形（閉窩式）が発生する動機に関して、「一に茎槽の有無に関わることであるが、編年的な推移が円滑であり、分布域もほぼ一致し、両者の関連が密接であることを示している。茎から茎槽への転換がなぜ行われたのかという点に関しては、楠本政助氏が茎の欠損率が高いことからくる技術的改良であろうと述べられたことがあるが、実験的研究に裏づけられた卓見というべきであろう」と誇らしく披瀝した見解も万全ではなくなるわけである。

後年の佐藤の方法のみを知るものにとって意外に思われるであろうことは、遺物の計測を行い、大きさの違いから大小の銚の用途の違いを推定している点である。ここでも計測法が明示されていないのが気になるが、全長を測り得た資料は49点提示されている。内訳は岩手県宮古湾の鎌ヶ崎貝塚2点、同大船渡湾の大洞貝塚17点（地点不明1、B地点2、C地点13、A地点1）、同細浦貝塚1点、同広田湾瀬沢貝塚20点、同中沢浜貝塚1点、宮城県松島湾宮戸島貝塚2点、同石巻湾沼津貝塚5点、千葉県銚子（利根川）余山貝塚1点であった。いずれも明治・大正期から知られた遺跡で

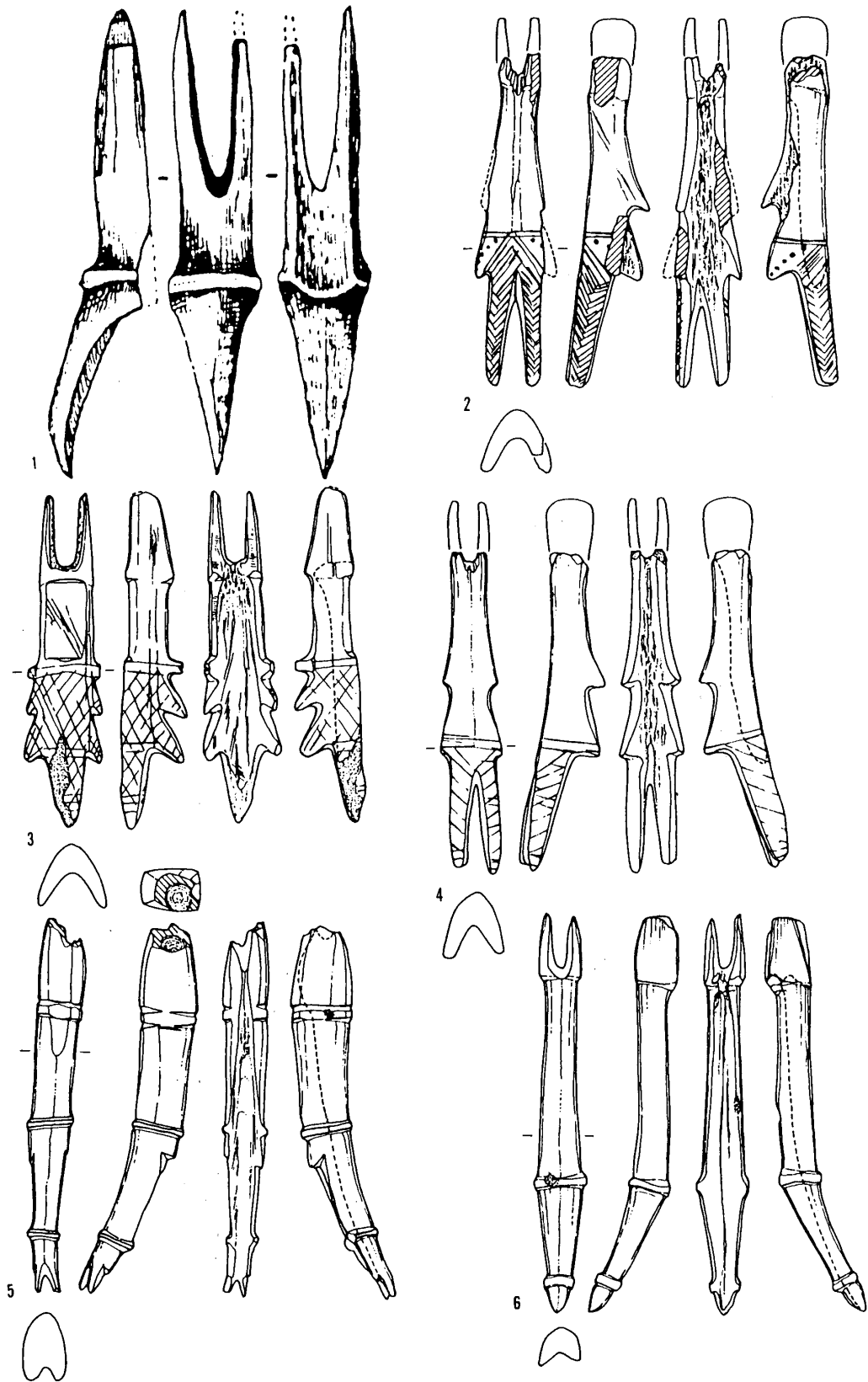


図5 縄紋文化後期（型式I2）
 1. 北海道礼文島船泊 2-6. 北海道入江貝塚

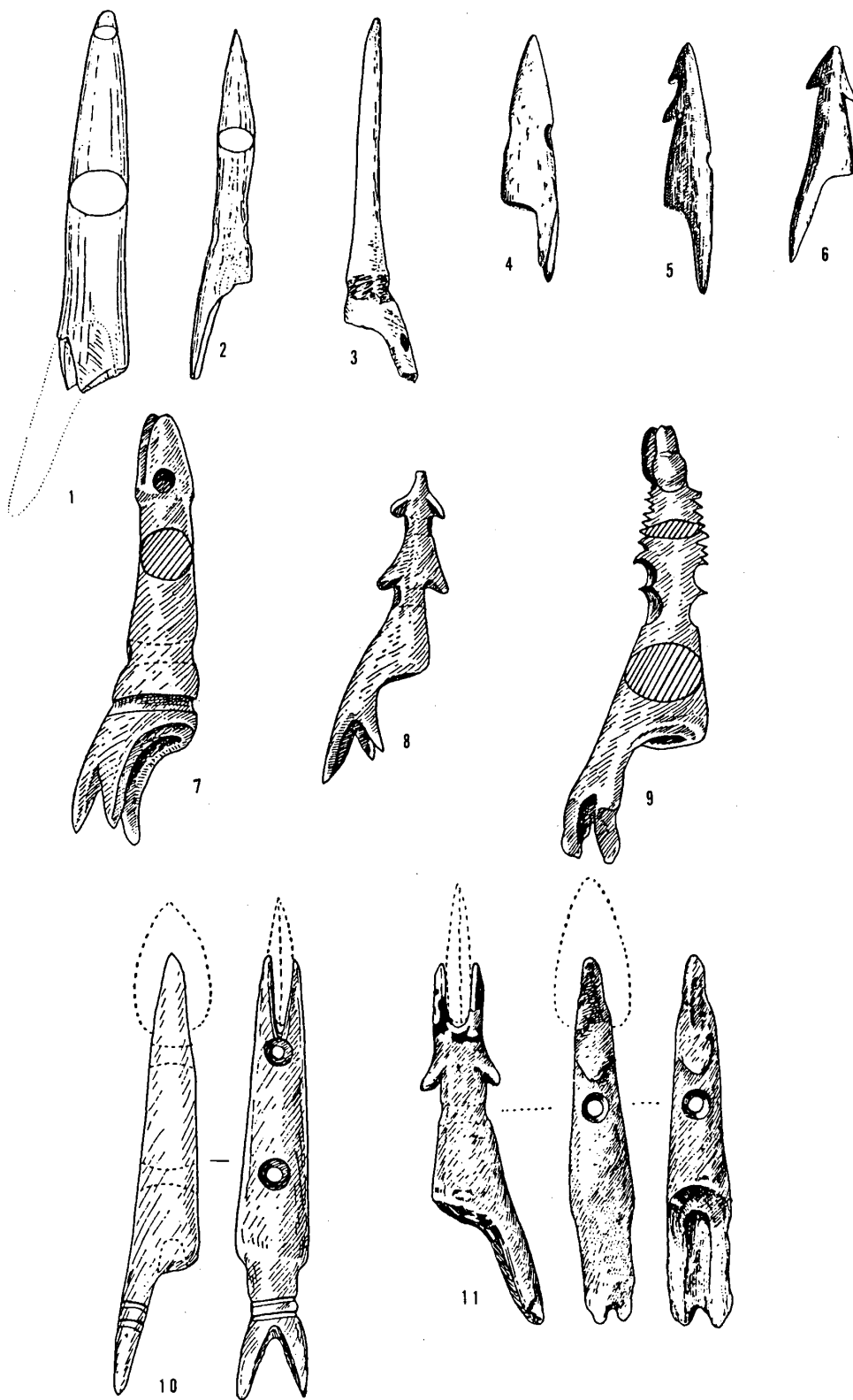


図6 縄紋文化後・晩期 (型式IIa1:1-6, IIa2:7-10, IIa3:11) $\frac{2}{3}$ (7-11不同)
 1, 2. 岩手県貝島貝塚 3. 同 鎌ヶ崎貝塚 5, 6. 同 瀬沢貝塚 4. 宮城県宮戸島貝塚 7-11. 同 沼津貝塚

あるが、資料は採集品が多く、佐藤自身も「高い資料的価値を置きがたい瀬沢貝塚」,「最も信頼し得る大洞貝塚C地点」という表現⁴⁸⁾で、この辺りの事情を斟酌している。計測の結果、8cm前後を境にして大小二型に分かれることに注目し⁴⁹⁾、尖頭に石鏃を装填するものに大型品が多いこと、「中期及び後期の型式Iの銚頭」が6cm台の大きさであるのに、礼文島出土のもの(図5-1)だけが10cmを越すことなどから、大型品は海獣類用、また小型品は、「山内清男氏が縄文式土器の分布に関連して縄文式文化人の生活に於ける鮭鱒の重要性を説かれたことがあった」⁵⁰⁾との記憶も与って、鮭鱒を主とする魚類用と推測している⁵¹⁾。

2. 縄文文化期以降⁵²⁾

続縄文文化期

長谷部言人の求めに応じて1926年に室蘭市本輪西貝塚を発掘した⁵³⁾山内清男は、貝層下部の亀ヶ岡式に並行する土器と表土の新しい土器に挟まれて、貝層上部から縄文の多い土器が出ることを見だし、後にこれを「続縄文式」と呼んだ⁵⁴⁾。ここでも佐藤はいまだ「本輪西上層式期」を使っている⁵⁵⁾。しかし、「縄文式文化期以降」の初っ端に「弥生式文化期」でなく「本輪西上層式期」をもってきたのはさすがで、これで佐藤の系統観及び北からの視点が明瞭になっている。

佐藤が分析対象とした「本輪西上層式期」の資料は14例、すべて分布は噴火湾沿岸に限られていた(図7)。型式Iすなわち半截長円錐形が6例、型式IIすなわち長円錐形が8例という内訳で、別個の系統に属すると思われる両型式が共存していることが、まずこの時期の特徴であると指摘している⁵⁶⁾。型式Iにおいては尖端に石鏃を嵌挿する例(同-6)に礼文島出土の後期の例(図5-1)からの系統を認め、型式IIにおいては索孔の位置が縄文晩期のそれと90度異なっていることを指摘している⁵⁷⁾。そして更に、長円錐形でかつ開窩を有する例(図7-9)を挙げて、両型式の「間の子」であろうと推測している⁵⁸⁾。ただし、当該例をもって型式II bx1という分類が適当か否かの判定は資料の増加を待ちたいとも述べている。現在の「後知恵」から、私は先にII bx1というような複雑な分類体系が多少煩雑であると述べたが、分類体系の簡潔性を多少崩してさえも、佐藤は銚頭の系統性と時代性を表したかったのである。「両型式銚頭の共存は縄文式文化終末期の変動を背景とするものであろう。伝統的要素の変容と、新しい要素の発生とを以て、この時期を特色づけ得るかもしれない」⁵⁹⁾と、簡潔ながら予見に富んだ表現で締めくくっている。

この後に述べるオホーツク文化期の銚頭の場合もそうであるが、特異な例を見つけ出し、そこに系統分類上の重要な意味を見いだす直感は天性のものであって、後年のナイフ形石器の編年的考察や、縄文中期の異系統土器の共伴例の研究で、佐藤の異能が遺憾なく発揮されることになる。

弥生文化期・古墳文化期

「弥生式文化期及び古墳文化期」への言及は、資料数が少ないため簡単である。しかし簡潔な表現ながら、「縄文式文化の終末以降、これと同等の生活形態の中に伝統的要素の一つとして、銚頭

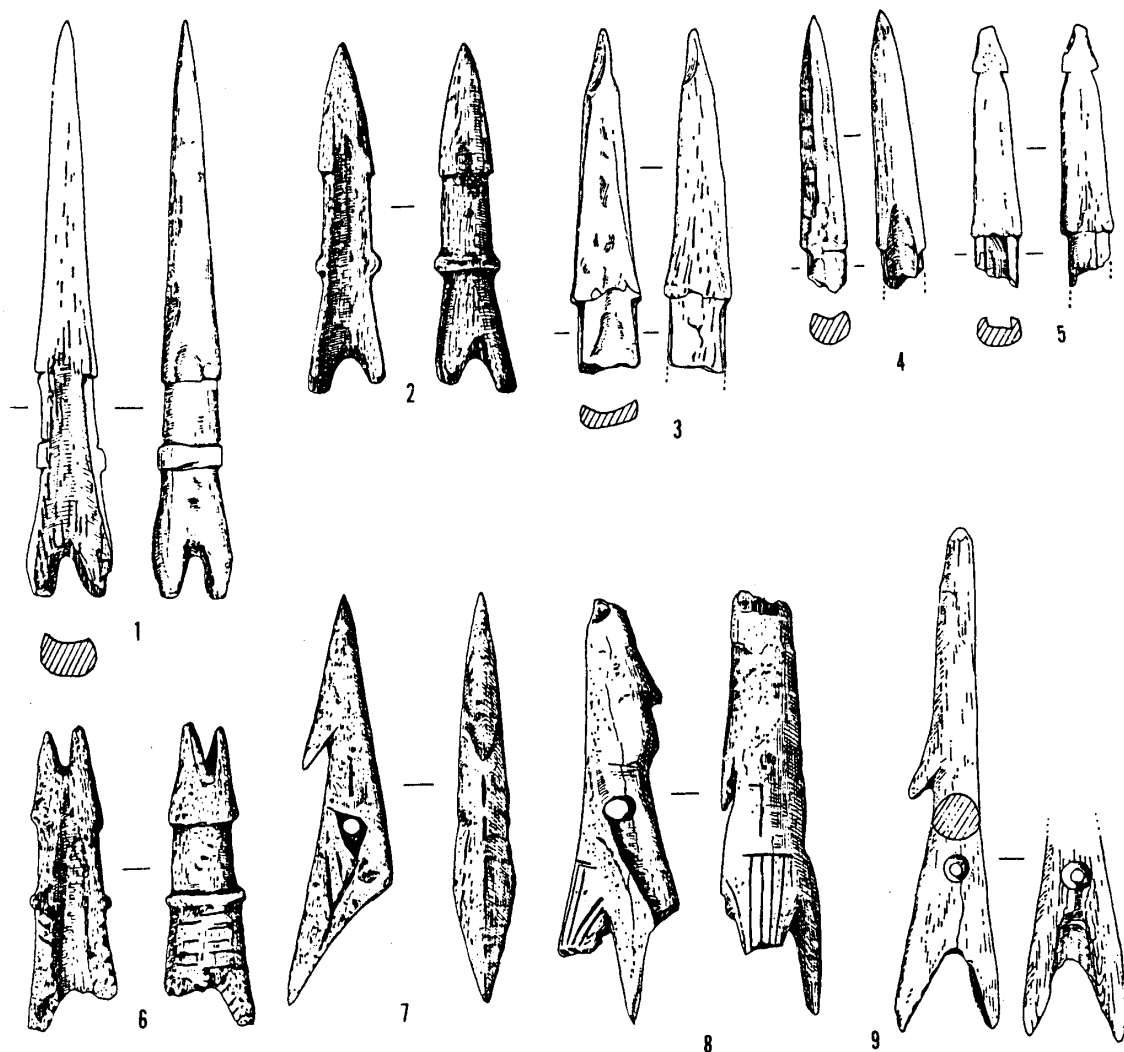


図7 続縄文文化期 (型式I1:1-5, I2:6, IIb1:7, 8, IIbx1:9) 2/3
 1. 北海道エトツケレップ 2-8. 同本輪西貝塚 9. 同尾白内貝塚

の形制が長く伝えられたらしい」し、「弥生式文化期以降の例が、共に洞窟遺跡より発見されていることは単なる偶然ではあるまい⁶⁰⁾という洞察には、発展段階論的弥生時代観を撃つ、今日的な視角を含んでいる⁶¹⁾。銚頭は縄文以来の型式II (長円錐形) であるが、「本輪西上層式期」同様、索孔の位置は縄文のそれと異なり抵抗面に平行に付けられている。ただし、「本輪西上層式期」のものが形態的にやや複雑で刻線による特徴的な文様を備えているのに対し、「弥生式期」のものは単純であることを指摘している。神奈川県毘沙門A洞出土例 (図8-1) と毘沙門B洞出土例 (同-2) が掲載されている。

古墳文化期のものは本文では塩釜市崎山圀洞穴出土例 (同-3) が挙げられているだけであるが、先に縄文後期としていた女神洞窟出土例 (同-4) を後にこの時期に移していた⁶²⁾。北海道型とも言うべき型式Iであるだけに、岩手県での出土については考えるところが多かったと思われるが、今や佐藤の考えを知る術はない。

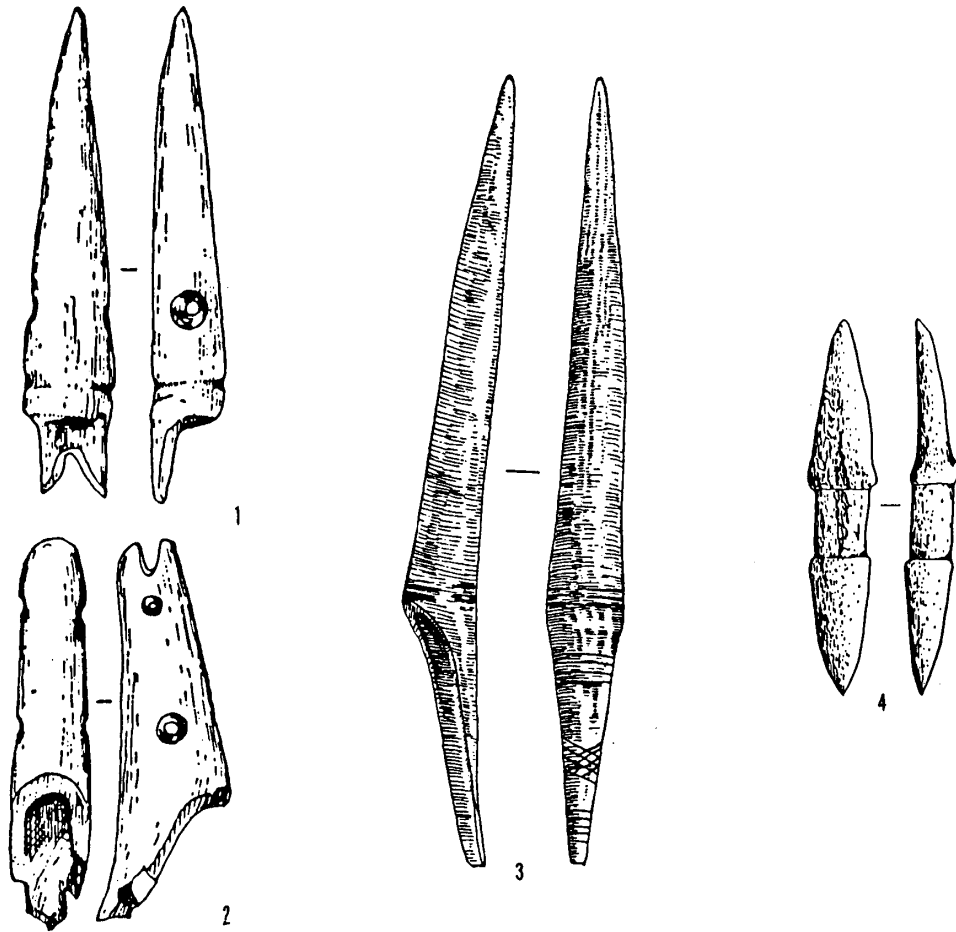


図8 弥生・古墳文化期(型式Ⅱb1:1,3,Ⅱb3:2,Ⅰ1:4) %
1. 神奈川県昆沙門A 洞穴 2. 同 B 洞穴 3. 宮城県崎山囲洞穴 4. 岩手県女神洞穴

オホーツク文化期

先にも述べたように、佐藤達夫の考古学研究の出発点はモヨロ貝塚の発掘経験に触発されたオホーツク文化への関心にあった。しかも当時、「オホーツク式文化期」の銚頭資料が最も充実していたので、当該期の資料が佐藤の系統論上重要な位置を占めていたと考えられる。

佐藤は当該期の銚頭を縄紋以来の伝統を伝える型式Ⅰ(半截長円錐形)⁶³⁾と、「オホーツク式文化期」に現れる、多く海獣の骨及び牙を素材とする平板状の、型式Ⅲ(狭薄)と型式Ⅳ(扁平)との3型式に大別した⁶⁴⁾(図9)。型式Ⅲと型式Ⅳとの違いは抵抗面を正面に見た時、前者は幅狭く、後者は幅広いということである。またオホーツク文化の分布地域に、樺太・利尻・礼文地域、北海道東北部・南千島地域、北千島地域の三つの地域性を認め、銚頭についてもその地域差が表れていることを指摘している⁶⁵⁾。注目されるのは、この地域性については、「かつて指摘せるとく」と記している⁶⁶⁾ことである。佐藤の論文を集成した二冊の著作に収められた論文中に見当たらないことから、先に言及した卒業論文を指しているのかもしれない。それはともかくとして、佐藤は当該期の銚頭を地域別、型式別に集計・表示している。

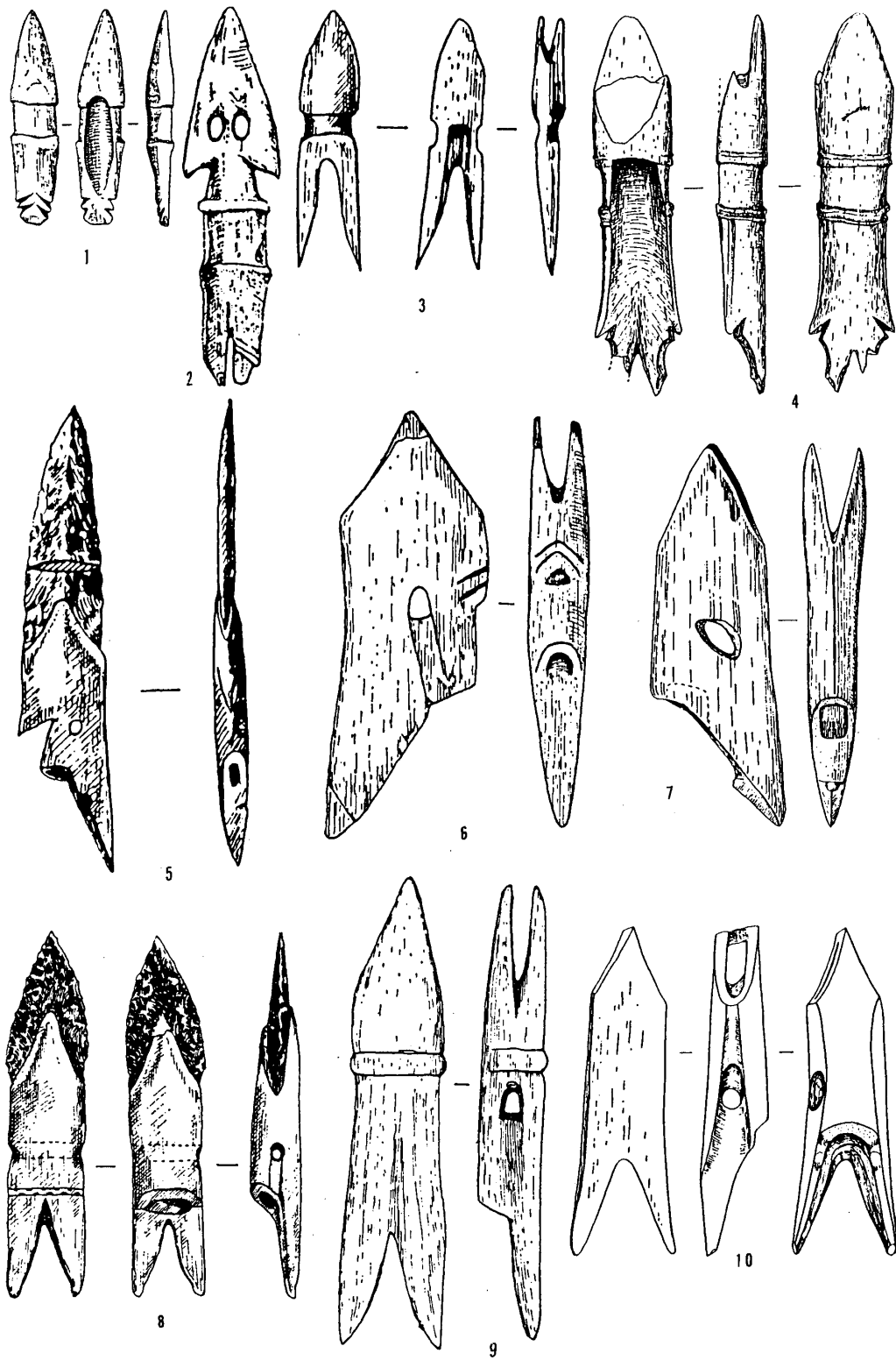


図9 オホーツク文化期 (型式 I1:1,2, I3:3,4, IIIb2:5-7, IVb3:8-10) 2/3
 1,3-6,8,9. 北海道モヨロ貝塚 2. 南千島択捉島ウエンベツ貝塚
 7. 北海道礼文島 10. 北海道礼文島ウエントマリ

佐藤の説明によれば、型式Ⅰは北海道東北部地域において特徴的に著しく、変化に富んでおり、「石鏃を嵌挿し、装飾が付加され、或いは索孔を設け、締着溝を備えるなど、全体として整備された一群」は、この地域のみ分布する。樺太・利尻島のもはや形態を異にして、アイヌ土俗のチロシに類似することを指摘している。型式Ⅰは北千島には存在しない。

型式Ⅲはほぼ全域に分布し、樺太⁶⁷⁾、利尻・礼文両島、北海道東北部地域では索孔が抵抗面に平行し、刃溝が抵抗面に直角なⅢb2が優勢である。距の末端に見られる小突起は「本輪西上層式期より受け継いだ特異な癖」⁶⁸⁾とみている。北千島が特異な様相にあることを佐藤は強調している。すなわち、北千島は型式Ⅲのみを有し、形態は他の地域のそれに比し単純かつスマートで、先端を尖頭形に作り出したものを相当含み、特殊な開窩を有するものを含むとしている。掲載図を見ると、単純かつスマートな北千島例は型式Ⅲから独立させてもよいほど形態が特異である。戦前からの系統観を承けて、佐藤は北千島例をエスキモーにおける最も普遍的な型式に対比している⁶⁹⁾。

型式Ⅳに関しては分布の重なりと形態の相似から、「明らかでない」⁷⁰⁾としながらも、「縄文式文化」以来の型式Ⅰが極めて変化したものである、と私かに考えていたような表現をしている。また、樺太出土のⅣa3を例として、続く「プロト・アイヌ期」に連続していくことも示唆している。

縄紋晩期の銚頭と同様に、オホーツク期の銚頭95例を計測している。オホーツク期の銚頭については前者ほどの機能についての具体的指摘がなく、型式Ⅰが「その多量と形態的变化とからして、北海道東北部に於ては恐らく種々の対象に極めて一般的に使用されたものであろう」⁷¹⁾、といった程度の言及にとどまっている。

プロト・アイヌ期

擦紋文化期及びそれ以後のオホーツク文化に並行する、あるいはそれ以降の文化については、当時、はなはだ不明瞭であった⁷²⁾。佐藤は、アイヌの土俗の時期をアイヌ期とし、アイヌ期に至る期間をプロト・アイヌ期と称した⁷³⁾。ただし、プロト・アイヌ期の銚頭資料はすべてかつてのオホーツク文化の分布圏内出土のものに限られており、擦紋文化の分布圏に未発見であった点は、佐藤の論考を検討する際に考慮しておかなければならない。それでも佐藤は、「しかし一、二の型式からは非オホーツク式文化的乃至非内耳式土器文化的な要素を認めることができるように思われる」⁷⁴⁾と、その後の展開を予測するような考えを書き加えていた。

この時期の銚頭の型式はⅣax1とⅣax3が主体である⁷⁵⁾ (図10)。両者は尖頭部に鏃を装着するかどうかだけの違いだから、オホーツク文化期のものとは開窩を有することがまったく異なっている。索孔の位置も違っている。佐藤は更に距が背面に張らず側方に張ることも違いとして挙げている。その分布地域が内耳式土器の分布地域に限られているので、オホーツク文化との関連が注意されなければならない、としているものの、その後の文章には否定的なニュアンスが込められている⁷⁶⁾。海馬島出土の例は年代が不明であるが、閉窩式であるのでアイヌ期に並行するかもしれないという⁷⁷⁾。

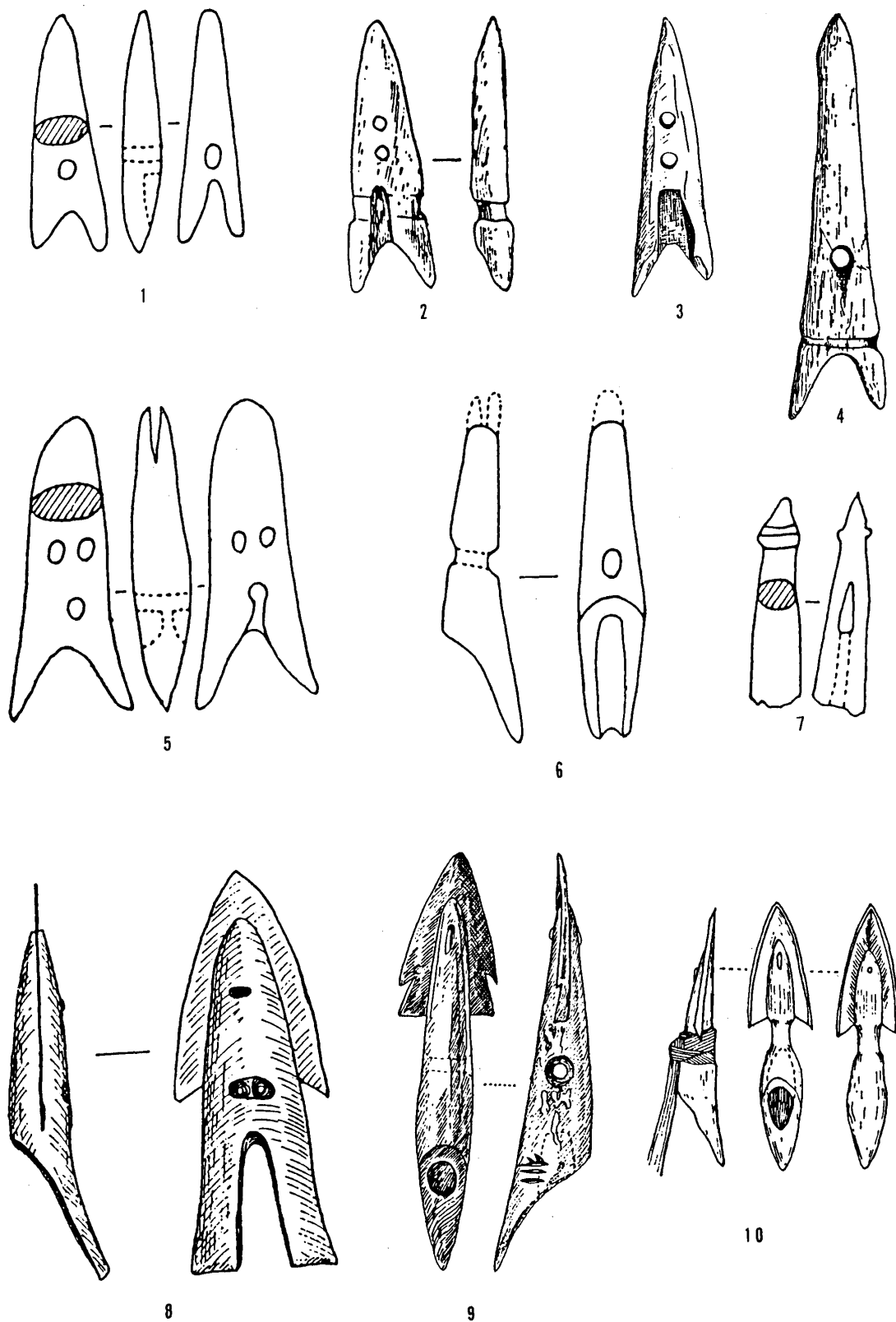


図10 プロト・アイヌ期 (1-7) とアイヌ期 (8-10)
 (型式IVax1:1-4, IVax3:5, IIa3:6, IIb1:7, IVa3:8, IIb3:9,10) ⅓ (9, 10不明)
 1, 5, 7. 北海道オカレムバウシ貝塚 2-4. 同モヨロ貝塚 6. 同オポロ貝塚 8-10. 不明

型式IVax1とIVax3の銚頭以外に、まったく類を異にする例として、厚岸町オポロ貝塚出土のものとオカレムバウシ貝塚出土の2例を図示している(同-6, 7)。後者は型式IIb1と見立てているものの、破損の上、図が不完全なため判じがたく、オホーツク的なIVb1かIVb3かもしれないとしている。だが、前者はIIa3である。刃溝の位置が縄紋のものと異なるが、そのような特例は宮城県沼津貝塚例にも存在することであるから、縄紋的な銚頭であり、したがって「本輪西上層式期」(恵山期)の型式IIの伝統につながる、というのが佐藤の判断である。同型式の銚頭がアイヌ期にも存在することにも言及している。

エスキモーの東部チュールレの西方への移動の結果が、カムチャッカを経て北千島に影響を及ぼしたこと、しかしながら、その影響がオホーツク文化期やアイヌ文化期の銚頭の型式IVにそのまま続かなかつたことを述べ、「却って北千島に於けるアイヌ期の銚頭に極めて類似した形態を見出すことができるが、これはチロシと同様のケースである」⁷⁸⁾、と記した佐藤は、オホーツク文化期の型式IIIとIVに属する銚頭と、エスキモーの銚頭との間には、北千島例を除き密接な並行関係を認めることができないこと、だが、それらの型式は縄紋以来の諸型式に比し、あまりにも異質であること、そこから、先に見たようにオホーツク文化期の銚頭に二系統あることを論じたのである。またそれと同様に、不十分な資料からではあるが、プロト・アイヌ期においても二系統の銚頭の存在を推察したわけである。

アイヌ文化期

佐藤はアイヌ文化期の銚頭においても二系統の対立を見ている(図10)。使用範囲は極めて限られていたかもしれないとしながら、縄紋以来の伝統を見せる銚頭(型式IIb3)を挙げている。優勢なのはこの場合も型式IVである。しかし、前時期の形態をそのまま伝えていない。すなわち、閉窩を有するIVa3に属する。同型式は距が背面に張るオホーツク型と、両側に張るプロト・アイヌ型(擦紋型)の2亜型を含むとしている。

6

総括

最後に佐藤の掲げた表31「日本産銚頭時期別型式別集計」(表1)を参照しながら、近年の成果(参考図参照)を考慮に入れ、佐藤の論点を敷衍して総括しておこう。

わが国における回転式銚頭には異なる三つの系統が認められる。その一は第I群型式Iの1、すなわち尖頭半截長円錐形(「開窩式」・「抉入離頭銚」・「一王寺型」)銚頭の系譜で、縄紋時代早期末に発し(あるいは大陸からの伝来か?縄紋後期に西北九州から山陰地方にかけて別途に現われた型式I1の銚頭は、沿海州との関連が指摘されている)、続縄紋時代(恵山期)を経てオホーツク文化・擦紋文化に伝えられ、そこで大いに盛行した。プロト・アイヌ期まで使われ続け、やや変形してアイヌの銚頭として伝えられたようである。抵抗面に直角に銚を嵌挿する型式I2(「寺泊

表1 日本産銚頭時期別型式別集計 (佐藤論文から転載)

型式 時期	第 I 群										第 II 群							計	
	型式 I			型式 II							型式 III			型式 IV					
				a			b				b			a			b		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	x1	1	2	x1	3	x1	x3	3		
縄文式文化	中期	8																	8
	後期	2	1																3
	末期				116	23	1												140
本輪西上層式期	5	1					5	1		2								14	
弥生式文化期							1		1									2	
古墳文化期							1											1	
オホーツク式文化期	70	1	8								7	26	4	5				16	
プロト・アイヌ期	2					1	1							1	14	9		28	
アイヌ期									2					12		1		15	
計	87	3	8	116	23	2	8	1	3	2	7	26	4	18	14	10	16	348	

型J)は縄紋時代後期に出現し、いまだに数が少ないが、型式I1と同じ展開をしたようである。他方、抵抗面に平行に鍬を嵌挿する型式I3はオホーツク文化に特有であった。

その二は第I群型式IIのaの1、すなわち、おそらく縄紋時代前期の型式IIb1銚頭(「有脚型」)に発する燕形銚頭は、抵抗面に直角に鍬を嵌挿する型式IIa2とともに、後期から晩期にかけて盛行した。抵抗面に平行に鍬を嵌挿する型式IIa3は例外的存在であるが、プロト・アイヌ期にも認められる。他方、索孔の位置が縄紋時代のものと同様に90度ずれて抵抗面に平行する型式IIbは、続縄紋時代恵山期に特徴的であると同時に、本州でも弥生時代から古墳時代まで使われ続けた。抵抗面に平行に鍬を嵌挿する型式IIb3はアイヌによってごく近代に至るまで漁獲に利用され続けた。

以上の第I群と明らかに系統を異にする第II群は、オホーツク文化期に発する。抵抗面の狭薄な型式IIIは索孔が抵抗面に平行するbが専らである。抵抗面に直角に鍬を嵌挿する型式IIIb2が多いが、尖頭形を相当含み、そこには特殊な開窩を有するx1も含むなど、種々の変化にも富んでいる。

型式IIIがオホーツク文化に特有なのに対して、抵抗面の扁平な型式IVはオホーツク文化期に限らず、擦紋文化期以降にも盛行した。ただし、索孔と鍬とがともに抵抗面に平行する型式IVb3はオホーツク文化に特有のようである。索孔は抵抗面に直角である一方、鍬が平行するその型式IVa3はアイヌ文化期にわたって盛行した。擦紋文化期には開窩を有するx1、x3が盛行し、一部アイヌ文化期にも伝わった。

戦前からオホーツク文化の中にエスキモーとの交流の証拠を見いだそうという流れがあり、佐藤も当初そのパラダイムを共有していた。しかし、わが国における回転式銚頭の精査の後、次のような結論に達したのである。「総じて両者の間に相関関係を認めることはできないが、型式Iを除き、IIIとIVはエスキモーに於ける thin, flat 両型式に対応し、両者はほぼ同様な様相を持つことは否定し得ない。従って両者間に何等かの関係ありとすれば、発生的親縁関係を想定せざるを得ないであろう」⁷⁹⁾。

さて、本稿を閉じるに当たっての私の感慨であるが、今日、銚頭資料は1953年当時とは比べものにならない数が集められており、とりわけ、縄紋文化後・晩期の「燕形銚頭」、続縄紋文化期の「恵山型銚頭」、及び擦紋文化期・オホーツク文化期の銚頭については、鉤の有無、距の形態、索孔の数と位置、等の属性によって更に細分が可能となっている。

しかし、分類体系の枠組みは依然として佐藤のものが有効である。それにつけても、もしもその後の研究者たちがこの佐藤の論旨を念頭に置くことができたとすれば、少なくとも議論の射程がもっと大きくなったはずである、という感慨につきる。

おわりに

1953年という年は佐藤達夫の考古学研究のその後の方向を決定した重要な年である。青森県野辺地町在住の角鹿扇三との縁で、さらに六ヶ所村の二本柳正一を知る。こうして同年7月には二本柳が見つけていた唐貝地貝塚等の調査を行うことになる。またその年に山内清男が明治大学で1年間縄紋土器の原体の話を行っているが、東京大学人類学教室で同じ内容の講義が開講され、その交渉を通じて山内と親密になっていく。こうして佐藤は縄紋土器研究の世界に踏み出していくのである。それについては別稿にゆずりたい。

本稿を草するにあたり、以下の方々のお世話になった。

佐藤静江、渡辺兼庸のお二人には論文執筆当時の佐藤達夫先生についてお話を伺った。長沼孝、武藤康弘、柳澤清一の諸氏には文献の入手で便宜をいただいた。会田容弘氏には松本彦七郎の資料などの閲覧で、また氷見淳哉、玉橋さやかのお二人には東北大学考古学研究室所蔵資料の閲覧で、斎藤玲子さんには北海道立北方民族博物館展示のモヨロ貝塚資料の閲覧でお世話になった。岡本東三、坂口隆、高橋龍三郎、西川博孝の諸氏には阿佐ヶ谷先史考古学研究会例会で中間発表を聴いていただいた。特に、岡本氏からは佐藤先生の分類の意図に関して貴重な示唆を受けた。これらの方々に紙上を借りてお礼申し上げます。

また、菊地俊彦、馬目順一のお二人の業績から多くを学ばせていただきました。最後になりましたがお名前を記して、学恩に感謝する次第です。

付記

校正の時点で前田潮論文（1997「擦文文化の回転式銚」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集、97-122頁）を読むことができた。佐藤が知り得なかった、したがって本稿でほとんど触れることのできなかつた擦紋期の回転式銚頭を、I群a類b類、II群a類b類、III類、IV類に分類し、型式論的整理を行った上で、続縄紋文化→擦紋文化→アイヌ文化とう技術伝統の継承過程を強調している。ただし、前田も擦紋文化とサハリンのオホーツク文化の接触に簡単に言及してはいるが、技術伝統の継承過程は佐藤が示唆したように、時空間にわたってはるかに複雑な過程であったと思われる。

註・引用文献

- 1) 勅使河原 彰 1988『日本考古学史』UP 考古学選書1, 東京大学出版会, iii 頁。
- 2) 斎藤 忠 1995『日本考古学史』吉川弘文館, 312頁。(新版)
- 3) 斎藤 忠 1984『日本考古学史辞典』東京堂出版, 243-4頁。
- 4) 斎藤 忠 1985『考古学史の人びと』第一書房, 296-7頁。
- 5) 佐藤達夫編 1974『日本考古学選集21 山内清男集』築地書館, 2 頁。
- 6) 田中一郎 1978「東京大学文学部考古学研究室草創のころ」『琅扞(補)』駒井和愛博士記念集補遺, 106-57頁。
- 7) 佐藤は卒業論文の準備中に, 理学部人類学教室所蔵の骨角器を見に行った際に山内に一度だけ会っている。だが, この初対面の機会は, 別の場所にしまわれていた骨片どうしを接合した佐藤を山内に印象づけた, というエピソードを残しただけで完結してしまった。(佐藤静江談)
- 8) 佐藤静江編 1978「佐藤達夫略年譜」『日本の先史文化』河出書房新社, 501-5頁。
- 9) 児玉作左衛門 1948『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会, 10頁。
- 10) 同上, 10-11頁。
- 11) 駒井和愛 1950「序」『モヨロ貝塚資料集』米村喜男衛, 網走郷土博物館。
- 12) 東京大学文学部 1964「別篇 網走モヨロ貝塚」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻, 1-96 頁。
佐藤達夫は駒井和愛と共著で「オホーツク遺物の特色」と, 単著で「附・モヨロ貝塚の縄文, 続縄文及び擦文土器について」を寄稿している。
- 13) 河野広道 1972『続々北方文化論』河野広道著作集Ⅲ, 北海道出版企画センター, 234頁。第五章第二節「モヨロ民族に関する諸説」の記述からは, 「モヨロ貝塚調査団」による調査を前後する時期の関係者たちの関心は, いまだ「人種・民族論」にあった様子が浮き彫りにされる。縄文式土器に関しても, 当時なお「厚手式土器」・「薄手式土器」が使われ続けていたことが注意される。
- 14) 名取武光 1948『モヨロ貝塚と考古学』講談社支社(札幌), 141頁。
- 15) 今日のおホーツク文化観は当時と大きく異なっている。例えば, 菊地俊彦は, 「櫛目文土器や, また一部には型押文, そして南端部では縄目文の文様の土器をもったサハリンに既存の文化を基盤として, 「刻文土器の出現によって形成された文化複合がおホーツク文化と呼ぶべきもの」であり, 「そして刻文土器に伴う金属器の大量な流入, それによる金属器の日常的使用となり, これが骨角器の製作技術の発達をもたらし, 海獣狩猟経済を引き起こし, 更にそこに「家畜飼養という別途の経済形態が付加されることによって新たに形成された文化である」, と見做している(菊地俊彦 1995『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会, 特に第1章「サハリンのおホーツク文化」)。
- 16) 註14掲載『モヨロ貝塚と考古学』91-9頁。
- 17) 同上, 82-3頁。

1960年代からロシアの考古学者による, 沿海地方とアムール川流域における靺鞨・女真の遺跡の発掘調査が急速に進展し, それらの遺跡から出土した資料によって, おホーツク文化の大陸系遺物の類例は靺鞨文化・女真文化に見出されることが明らかになってきた。菊地俊彦は遺物群の年代の対応から, おホーツク文化の櫛目文・縄目文期の終末~円形刺突文期, 刻文・爪形文期, 沈線文・貼付文期の大陸系遺物が, それぞれ靺鞨文化の4~5世紀, 7~8世紀, 女真文化の10~11世紀の遺物群に対応することを指摘し, それに先立ってポリツェ文化(紀元前8・7世紀~3・4世紀)の文化圏との交渉を有することによって, 櫛目文・縄目文期に多くの大陸系文物が取り入れられていたことを立論している(註15掲載書, 特に第2章「おホーツク文化に見られる靺鞨・女真系遺物」)。

更に、史料と考古資料の照合から、7世紀中葉の流鬼は13世紀中葉の吉里迷の別名であり、両者はいずれもオホーツク文化の荷負者にあたるギリャーク民族であったことも立論している（同上、特に第3章「オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」と第Ⅱ部第2章「靺鞨と流鬼」）。

なお、菊地のこの説に関連して佐藤達夫の業績にも触れておく。考古学の方面から流鬼に最初に触れたのは佐藤の1967年の「流鬼考」である。史料と考古・民族資料の照合から、東洋史学者和田清のカムチャダール説に与している。この時期における「考古学上より見た7世紀の北方諸地域」の考察は、もっと評価されてもよからう（前掲『日本の先史文化』330-43頁）。

「渡来品」に話をもどせば、現代考古学ではこの種の貴重品あるいは「奢侈品」は、それが取り引きされる遠隔地間貿易が考慮されたり、「奢侈品」のきわめて一般的な流通形態である「贈与」に表れる権力関係が考慮されたり、「世界帝国」と「世界経済」＝「前近代的世界システム」の理論装置で解釈されることも可能になりつつある。イアン・ホダーが言うように、「遺物」はまず何よりも意味を持つ記号で、文化コードをもって解読しなければならぬシンボルであるという側面をもつ。『北東アジア古代文化の研究』のほか、山田悟郎・他 1995「オホーツク文化の遺跡から出土した大陸系遺物」、丹治輝一 1995「明清代中国東北部の交易経済の発達と貂皮」（いずれも北海道開拓記念館『北の歴史・文化交流研究事業』研究報告）に掲載、65-80頁、219-44頁）、及び、湯浅起夫 1996『世界史の想像力—文明の歴史人類学をめざして—』（新評論）の第3章『世界システム』概念の成立と展開なども参照されたい。

- 18) 佐藤達夫 1978『日本の先史文化—その系統と年代—』河出書房新社、470-6頁。
- 19) 註12と同上、317-29頁、及び261-70頁。
- 20) 児玉作左衛門と大場利夫が縫付用垂飾と推測した遺物である。縫付用垂飾とすると透彫りの窓やその中に残された突起について意味がよくわからないという理由から、佐藤は西部グリーンランドにおけるエスキモー土俗品を根拠に、ゆびぬき留めとしたのである。菊地俊彦は「鉄製鉬具を模倣して、革帯もしくは布帯に縫い付けた装飾品であろう」としている（前掲『北東アジア古代文化の研究』60-1頁）。
- 21) 東京大学考古学研究室 1951『考古図編』第11輯、図版1。
- 22) 前掲『日本の先史文化』に再録、452-4頁。
- 23) 『弥生』の誌名は八幡一郎の提案によるようである。同人誌を出そうとの議があった時がたまたま3月であり、いまでは正門近くに移っているが、当時は古色蒼然たる弥生町の門に程近いところに研究室があったから、そう提案したのだそうである（八幡一郎 1976『『彌生』蘇生』『弥生』No. 9, 1-2頁。斎藤 忠 1962『『彌生』の名』『弥生』No. 7, 2-3頁）。
- 24) 前掲『日本の先史文化』455-66頁。
- 25) 馬目順一 1983「閉窩式回転鉬」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣、210-24頁。
- 26) 渡辺 誠 1973『縄文時代の漁業』考古学選書7, 雄山閣。この研究書は1972年の時点で42遺跡536点の資料を扱い、その後の関連研究の基盤となったものである。回転式鉬頭の分類の細別に工夫を凝らしているものの、それがかえって今日の混乱をもたらした一因ともなっている。この点に関しては後述する。
- 27) 金子浩昌・忍沢成視 1986『骨角器の研究縄文篇Ⅱ』考古民俗叢書23, 慶友社、337-9頁。佐藤論文の内容を次のように要約している。

「原著は1953年（東京大学大学院特別研究奨学生論文）、縄文文化期から日本近世に至るまで、さらに環太平洋文化圏のものを主として扱う。

第Ⅰ・Ⅱ群に大別する。第Ⅰ群を縄文式文化期のものに第Ⅱ群はオホーツク文化期それ以降のものとする。型式Ⅰが開窩式、Ⅱが開窩式鉬頭で、索孔と鏃の方向で基本分類が行われる。長谷部言人、山内清男氏による分類の基本が整理されたものといえよう。

縄文前期に鹿角、円錐、距を欠く形態のものが初現し、縄文文化中期および後期に、鹿角枝を材料とする縦截の型式Ⅰがあり、末期にいわゆる燕形鉬頭である型式Ⅱaが支配的となる。参考資料140例、Ⅱ

a1-116例, IIa2-23例, IIa3-1例であった。全長8センチを境として大小2型がみられるとし、全体で16対33, ほぼ1対2, 大洞C地点で2対11という。この小型のものが鮭鱒を対象としてつくられたと推測している。

欲を言えば、縄紋期に絞っているにしても、佐藤論文の先見性・包括性・独自性がもう少し窺い知れる要約であれば、佐藤論文を参照する研究者が増えていたであろうと思われる。

28) 佐藤達夫 1983『東アジアの先史文化と日本』六興出版, 368頁。

29) 同上, 363-4頁。

同じく広い視野から回転式銚頭の研究を続けている山浦清は、佐藤が1964年の「女満別式土器について」で展開した論(前掲『日本の先史文化』216-26頁)を下敷きとして、中国新開流遺跡の新資料に注目して、日本における回転式銚頭の出現が石刃鏃文化の北海道への波及によってもたらされた可能性を指摘した(山浦 清 1983「中国東北地区における回転式銚頭について」『貝塚』31, 11-6頁)。最近も、佐藤の1952年の論文「セント・ローレンス島出土の銚について」で言及されている南東ヨーロッパ先史時代の「南方型」に注目し、類例を探し挙げている。そしてこれをチョウザメ類の分布域に重ね合わせ、その上で目を東に転じ、アムール川流域のチョウザメ類の分布と日本を含めた太平洋北西沿岸地域における同様の現象を指摘して、海獣狩猟文化の起源問題に一石を投げようとしている(山浦 清 1994「ヨーロッパ先史時代の回転式銚頭」『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』岩崎卓也先生退官記念論文集, 雄山閣, 464-71頁)。山浦のこうした伝播・系統観は列島内を含め、最近の論考で更に明示されている(山浦 清 1996「日本先史時代回転式銚頭の系譜」『ヒト・モノ・コトバの人類学』国分直一博士米寿記念論文集, 慶友社, 545-56頁)。ただし、後に触れるように、山浦の列島内での系統関係は問題含みのものである。

30) 前掲『東アジアの先史文化と日本』, 349頁。

31) Leroi-Gourhan A. 1946 *Archéologie du Pacifique-Nord : Matériaux pour l'étude des relations entre les peuples riverains d'Asie et d'Amérique*. Paris : Institut d'Ethnologie.

32) 前掲『東アジアの先史文化と日本』, 352-3頁。

33) 「スキタイ青銅鏃およびアルプス地帯, ヴォルガ流域発見の骨角槍頭あるいは鏃と, エスキモーの閉窩式銚頭との間にはなお大きな径庭が横たわる。しかしより進歩した文化の異質的な要素の影響を除いて、停滞社会における新しい生活手段の発見を説明し得るものはあるまい」(前掲『日本の先史文化』461-2頁)。大きく隔たる時空間を越えて系統関係を求めた「旧伝播論」と、オホーツク文化の文化要素にエスキモー文化との関連を想定した、今日ではいずれも否定的な「パラダイム」を、この論文が前提としていることは指摘しておかなければならない。

34) 現代考古学においては、第一のタイプは「一般的比較法」として、第二のタイプは「歴史的遡及法」として方法論的に洗練化されている。拙著『現代考古学』(同成社), 150-1, 154頁を参照されたい。

35) 馬場 脩 1937「千島群島出土の狩猟具及び漁具」『民族学研究』第3巻第2号, 89-131頁。

佐藤はそれぞれを「鈎引式銚頭」, 「回転式銚頭」と呼び変え、銚頭をその運動に従ってこの二種に分かつことは意味のあることであるとした。そして、「回転式銚頭は更に形態的差異に従って、開窩式と閉窩式とに大きく二分することができる。この形態差が機能上にどれほど影響するか私は知らないが、回転式銚頭の起源をたずねる上には重要な点であるように思われる」と続けている(「セント・ローレンス島出土の銚について」前掲『日本の先史文化』455-66頁)。

36) 前掲『東アジアの先史文化と日本』, 351頁。

37) 渡辺誠も、「開窩式・閉窩式といった伝統的分類では不十分なこと、とりわけ南境型・沼津型は例外扱いにしなければならないこと、伝統的分類による同一名称で包括し得ても、本来異文化伝統に属するものを同一名称下の亜分類にとどめることは不適確であること、同一文化伝統内の同類のものでも、全体の形態上区別することが望ましいことがあることなど」の理由から、遺跡名を冠して、1船泊型, 2一

王寺型、3南境型、4沼津型、5燕形、6寺脇型の6類に分類している。後に述べるように渡辺の意図は、燕形銚頭の系統を南境型に求めるものであったが、しかし、分類法・分類基準を明示しないその並列的な分類は系統分類を逸脱している。そのため、各型式間の展開は説得性に欠けるように思われる（註26の文献、139-204頁）。分類基準の階層化を行う必要があった。

一王寺型（開窩式）について論じた渡辺の最近の論文でも、一王寺型を7類に分け、各類の「形態学的関係」をA類→C類→E類およびB類→D類→F類→G類と整理した後で、「ただしこれは出現の順序をしめしているかにみえるが、実際にはE類がA・B類とともに縄文早期にみられ、実態は複雑である」とも書いており、やはりその分類法の有効性・有意性に疑問が残る（渡辺 誠 1995「東北地方における一王寺型（開窩式）離頭銚頭について」『みちのく発掘—菅原文也先生還暦記念論集—』305-14頁）。A類を3種、B類を2種、C類を4種、D類を2種、E類を4種、F類を5種に細分しているのだが、体系的分類というよりも個別分類といった観がある。

大竹憲治も大筋で渡辺の分類を踏襲しながら細分を試みている（大竹憲治 1989『骨角器』考古学ライブラリー53、ニュー・サイエンス社、18-32頁）。したがって、渡辺分類と同じ問題を抱えることになった。

その点、馬目順一の分類は有茎式銚・開窩式銚・閉窩式銚のうち、閉窩式銚だけを取り上げたものではあるが、刃溝と索孔の腹・背面に対する位置の組み合わせを基準として4タイプ（縄文類型・続縄文類型・弥生類型・アイヌ類型）に分けており、その分類法は明快である（註25の文献）。

金子浩昌・忍沢成視の分類も基本的には銚頭Ⅰ（有茎式銚）と銚頭Ⅱ（開窩式銚・閉窩式銚）の大別で、閉窩式を索網を結びつけるための加工の方法（孔と溝）によって二分し、さらに形態などを考慮した細分を行っている（金子浩昌・忍沢成視 1986『骨角器の研究 縄文篇Ⅰ』考古民俗叢書22、慶友社、109-25頁）。

38) 山内清男が1937年の「縄紋土器型式の細別と大別」において、縄紋時代全期を早・前・中・後・晩の五期に大別する編年表をすでに発表していたが、佐藤の目にはまだとまっていなかった。名取武光の1948年の『モヨロ貝塚と考古学』中でも、厚手式・薄手式が使われており、山内の革新的なアイデアもなお一般化していなかったようである。

39) 1965年の網走湖底遺跡と釧路市東釧路貝塚の調査以来、早期の銚頭は北海道においてのみ分布すると思われていた。それらはすべて開窩式である（金子浩昌 1973「北海道縄文時代の骨角製銚頭と栄磯岩陰出土の資料」『栄磯岩陰遺跡発掘報告』北海道島牧村教育委員会、43-54頁）。北海道でのこの開窩式銚頭の系譜はオホーツク・擦紋文化期まで一貫して継続する（参考図1：大塚和義 1966「扶入離頭銚」『物質文化』7、33-46頁）。

本州ではその後1977年の青森県教育委員会による八戸市長七谷地貝塚遺跡の発掘で、早期末赤御堂式土器に伴って、同じ開窩式銚頭が4点出土した（図3-4~7：青森県教育委員会 1980『長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第57集）。青森県ではこの系統の開窩式銚頭は前期まででいったん途切れたようである。

この北海道系の開窩式銚頭とは別途に、西北九州・山陰地域にも開窩式銚頭が知られている。山浦清はその系譜を朝鮮半島東岸を経由した沿海州に求める説を発表している（山浦 清 1987「縄文時代の漁撈活動」『古代の日本』第8巻、中央公論社、87-126頁。註29前掲1996年論文）。岡村道雄も、縄紋時代の後期に対馬や福岡・長崎・熊本・島根各県の貝塚や洞穴遺跡から出ている、オタマジャクシ形や柳葉形の開窩式銚頭から、北方とは別途に環日本海西部の交流が想定されるという（岡村道雄 1996『貝塚と骨角器』日本の美術 No. 356、至文堂、78頁）。

40) 前掲『東アジアの先史文化と日本』291頁。

41) 佐藤が図示した例は宮城県大木囲貝塚から山内によって検出された銚頭で、前期中葉の大木3式期のものである。類例は上川名貝塚、川下響貝塚など前期の遺跡からの採集品が知られていたが、近年宮城

県土浮貝塚で前期初頭の上川名Ⅱ式土器（花積下層式並行）に伴って出土した。この形態の最古の例である（図4-2：角田市教育委員会 1993『土浮貝塚』角田市文化財調査報告書第13集，25頁）。土浮貝塚例はソケット部分の一部が厚みをもっており，もしこれが距の祖形であるとすれば，索孔の位置は佐藤が大木Ⅷ例で想定した通りである。

同県仁斗田貝塚から大木8b期相当のものも知られているが，馬目順一の謂うこの「有脚型」系の銚頭は今も数少なく，その系譜がはっきりしない。後期以降に盛行するいわゆる「燕形銚頭」の祖形を，馬目は「有脚型銚」からの変遷で考えようとしている（註25掲載文献）。「無脚型」の上川名銚（上川名上層式）→「有脚型」の大木銚（大木3式）→響銚（大木6式）→「有尾型」の榎林銚（中期末）という変遷観である（福島県立磐城高等学校史学部後援会 1980『薄磯貝塚』86-91頁）。大木Ⅷ例を佐藤が索孔を抵抗面に平行していると見立てたのに対して，馬目は直行するとして平行する続縄紋型・弥生型と対置する縄紋型の系列に入れている。

42) 前掲『東アジアの先史文化と日本』所収の図版キャプション参照。

本の編集に当たった渡辺兼庸に聞いたところでは，元原稿に書き込まれていたという。本文でも触れたように，唐貝地貝塚例を掘り出した直後のことかもしれない。渡辺誠の「一王寺型」の基準資料でもある。註37も参照されたい。

ところで，東北地方の中期の銚頭としては，楠本政助のいう「古式離頭銚」が今日よく知られている。それは大木8b~10式土器に伴う，旧来骨鏃と称されていたものの中から，楠本が離頭銚としての機能を持つものを抽出したもので，有茎式である（楠本政助 1960「宮城県南境貝塚出土の離頭銚頭について」『東北考古学』第1輯，34-6頁）。渡辺の「南境型」である。

43) 前掲『東アジアの先史文化と日本』所収の図版キャプション参照。

大塚和義は両側に抉りのあるペン先形を呈する当例と同種の銚の一群を「抉入離頭銚」と呼んで，類例を収集して考察している（註39掲載文献）。参考図1及び註37も参照されたい。

後期の他の2例は渡辺の「船泊型」である。従来，礼文島船泊遺跡からの8点が知られていたにすぎなかったが，最近，噴火湾に臨む虻田町入江貝塚からも出土した。先端部に鏃装着用の刃溝を有する（根挟み式）例が16点収集されているが，全体に細い沈線による紋様が施された尾部が叉状に加工され，側縁に鉤（逆刺）を有する形態が特徴的である。叉状をなす尾部形態は燕形銚頭のものに似るといふ。調査はC地点貝塚の破壊によって生じた廃棄土砂（貝層）の回収作業であったため，帰属年代が確かでないが，後期初頭と見られている（図5-2~6：北海道虻田町教育委員会 1994『入江貝塚出土の遺物』虻田町文化財調査報告第4集）。

44) 長谷部言人の命名になる銚頭で，長谷部はこの「円錐筒形の銚頭が扁平有孔の銚頭より変化した」と考えた（長谷部言人 1926「燕形銚頭」『人類学雑誌』第41巻第3号，141-5頁）。

渡辺誠も「燕形銚頭」（閉窩式）の祖形を中間形態である「沼津型」（有茎式）を介して楠本政助の「古式離頭銚」，すなわち「南境型」（有茎式）に求めている（渡辺誠 1969「燕形離頭銚頭について」『古代文化』第21巻9・10号，229-33，219頁）。これは馬目順一が言うように，長谷部言人の「扁平有孔の有茎式銚説」に連なる「ネオ有茎有孔銚説」とでも言うべき説で，佐藤，馬目の系統観と対峙している。渡辺は，「一に茎槽の有無に関わることであるが，編年的な推移が円滑であり，分布域もほぼ一致し，両者の関連が密接であることを示している。茎から茎槽への転換がなぜ行われたのかという点に関しては，楠本政助氏が茎の欠損率が高いことからくる技術的改良であろうと述べられたことがあるが，実験的研究に裏づけられた卓見というべきであろう。したがって一部の研究家が言うような両者を無関係とする考えは，木をみて森を見ぬそしりをまぬがれないであろう」（前掲論文，230頁）と述べている。しかし，楠本自身は，「将来，資料の増加を俟って回転銚に変化する過程を追求したい」としていた（楠本政助 1969「縄文中期における古式離頭銚の変遷」『古代文化』第21巻第3・4号，29-40頁）。

「古式離頭銚」が回転銚に変化する過渡期の様相を明示する例が出土するか，「有脚型銚」の系統が

はっきりするまで、渡辺説と馬目説の甲乙は付け難い、と言いたいところであるが、佐藤の系統分類を考慮して、馬目説に軍配を上げておく。その意味で、南境貝塚出土の銚頭を岡村道雄が「古式の燕尾型銚頭」と呼ぶ（註39の文献、70頁）のは勇み足で、学史的配慮に欠けていると思われる。

- 45) 馬目順一によれば、後期中葉の堀之内Ⅱ式期に属する岩手県貝鳥貝塚出土例、あるいは加曾利B式期に並行する宮城県宝ヶ峰貝塚出土例あたりがこの形態の古い例であり、「出現時の縄文前期前葉と、器種が出揃い、刃溝特大型がその組成の中に窺われる縄文後期末葉の貼瘤土器期と、さらに、組成のうち、刃溝特大型の比重が著しく増す晩期後葉の大洞C2式・A式期との3期に」、閉高式銚頭の画期が認められるという（参考図2：註25の文献）。

貝鳥貝塚は岩手県南端、仙台平野の最奥部の北上水系沿岸域に位置しており、「燕形銚頭」の分布圏を外れている。したがって、その系譜を考える上ばかりでなく、貝鳥貝塚出土の2例（図6-1, 2：草間俊一・金子浩昌編 1971『貝鳥貝塚—第4次調査報告—』岩手県花泉町教育委員会）の「履歴」を洗い出せばおもしろいであろう。林謙作は「縄紋人の領域」をテーマとする論考中で、「いわば場違いなところに紛れ込んだ迷子である」と表現している（林謙作 1993「縄紋時代史18. 縄紋人の領域（5）」『季刊考古学』第44号、95-102頁）が、それだけでは済むまい。

小川貝塚例は八幡一郎によって、「陸前国宮戸島里浜貝塚等から多数発見される索縄孔を有する銚の一形式に属する」と記されている（八幡一郎 1925「磐城国小川貝塚発見の骨角器」『人類学雑誌』第40巻第9号、326-35頁）が、挿図からは燕形と認めるのが難しい。佐藤は八幡の判断を踏襲したようである。

分布について付言しておく、小川貝塚より南の福島県磐城海岸も分布のひとつの中心であることがわかってきた（福島県磐城市教育委員会 1966『寺脇貝塚』、いわき市教育委員会・他 1988『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊、山田昌久 1992「貝塚と貝塚に残された道具—地域集団群の一活動拠点として貝塚を見る立場—」『季刊考古学』第41号、41-6頁）。馬目順一は当地域の閉高式銚頭を尖頭形の「有脚型」と刃溝を有する「有尾型」に大別し（参考図3）、この組み合わせが仙台湾や大船渡湾周辺の銚頭と異なる、当地域の特異性であることを強調している（前掲『寺脇貝塚』89-91, 160-3頁。1996年10月26日の早稲田大学小野記念講堂における公開講演）。講演で、馬目は新資料を紹介して、その特異性は寺脇貝塚消滅（大洞C2）後、大洞A期頃に仙台湾周辺の特徴を有する銚頭の出現で終わりを向かえた可能性を指摘した。

ところで「有脚型」は渡辺誠の「寺脇型」で、渡辺は燕形からの変形形態と見做している。しかし、「有脚型」の系統が縄紋前期にまで遡るのであるから、ここでも渡辺の見解は成り立たない。なお、分布の北限は今のところ岩手県北部の根井貝塚である（鎌田裕二 1994「三陸北部の骨角器」『考古学ジャーナル』No. 383, 2-7頁）。山浦清が最近この「寺脇型」と続縄紋期の「恵山型」との系譜関係を大胆にも示唆している（註29掲載の1996年論文）が、上述の馬目の説明とは当然ながら適合しない。

- 46) 前掲『東アジアの先史文化と日本』354頁。
47) 里浜貝塚の関連資料を実見中に黒色の石片（珪質粘板岩？）が刺さった例を会田容弘に教えられた。鋭利な刃縁をもつ剥片で鹿角の素材を削っている最中の刃こぼれと思われる。ちなみに、仙台湾沿岸の後・晩期遺跡の剥片石器の材料は、摺藪貝塚と中沢目貝塚で頁岩・珪酸鉱物、田柄貝塚で頁岩・凝灰岩、貝鳥貝塚で粘板岩・黒曜石、里浜貝塚で凝灰岩・珪酸鉱物が主に利用されている（註45の林論文）。

会田容弘は宮城県里浜貝塚台地地点の1953年発掘調査出土遺物を基本資料として、閉高式銚頭の製作工程の復元を図っており、素材取得の段階での鹿角の分割には石斧・石篋あるいはチョッパーのような石器での叩き割りが多用されていたことを見いだしている（会田容弘 1994「角器製作技術研究の方法—里浜貝塚台地地点出土閉高式銚頭Ⅱ製作工程の復元—」『山形考古学』第5巻第2号、15-22頁）。

- 48) 前掲『東アジアの先史文化と日本』356頁。
長谷部言人 1925「陸前大洞貝塚（発掘）調査所見」『人類学雑誌』第40巻第10号、349-61頁を参照されたい。

貝塚の層位的発掘は松本彦七郎による1919年の里浜貝塚寺下圀地点の発掘調査に始まる(会田容弘 1996「松本彦七郎の層位的発掘の再検討—宮城県・里浜(宮戸島)貝塚の資料による—」『古代文化』第48巻第1号, 35-50頁)が, 渡辺誠が集成した時点でも所属時期の明確なものは60点にも満たず, 編年的研究は極めて不十分であった(註26の文献)。

1979年に調査された宮城県田柄貝塚では, サンプルング・エラーをなくすために土壌をすべて採集して水洗選別が行われた。そのため221点も収納された燕形銚頭のうち, 大木8b(Ⅱ)期から宝ヶ峰, 金剛寺, 大洞B, 大洞C1(Ⅸ)期までのいずれかの時期に限定できるものは186点(84.2%)にもなる(参考図4: 宮城県教育委員会・他 1986『田柄貝塚Ⅲ—骨角牙製品・自然遺物編—』宮城県文化財調査報告書第111集)。報告書で6類に分類されたうち, Ⅱ-b-4類とされた鉤を有する銚頭は時期不明のものが1点出土しただけで, 鉤を有する銚頭を主体とする大船渡湾周辺の貝塚と対照的である。燕形銚頭の分布の中心である仙台湾周辺と大船渡湾周辺との両地域にも地域性が見てとれるという(註45で言及した馬目の講演)。

この調査以降, 里浜貝塚に代表されるように, 今日では編年的研究ばかりでなく, 「動物考古学」の基礎的作業としても貝塚の微細な発掘調査が行われるようになってきている(東北歴史資料館 1985『里浜貝塚Ⅳ』東北歴史資料館資料集13, 同 1986・1987『里浜貝塚Ⅴ・Ⅵ』同15・19)。

- 49) 渡辺誠の計測によれば, 燕形銚頭のうち尖頭形のもの5cm前後に, 石鏃を挟むために又状に分岐しているものは8~10cmに分布の中心がある。また距が二又(尾数が2)のものは5cmに, 三つ又(尾数が3)のものは10cmに分布の中心があるという(註26の文献)。
- 50) 山内の「サケ・マス・ドングリ論」については, 後年佐藤自身が次のように言及している。「フランス上部旧石器時代終末のマグダレニアンにおけるブリティッシュ・コロンビアのインディアンとのそれと比較した, チャイルド教授の所論と好一対をなすものであろう。しかし博士の立論の方が早い。はじめ研究会や講演会で話されていたが, なかなか活字にされなかった。ようやく「日本先史時代概説」と「縄紋時代研究の現段階」中に要約して述べられたにすぎない」(佐藤達夫 1974「学史上における山内清男の業績」『日本考古学選集21 山内清男集』築地書館, 1-11頁)。
- 51) 燕形銚頭をマグロ用と考えた江坂輝弥の説を受けて, 渡辺誠は関連貝塚出土の動物遺存体の多寡から判断して, 「南境型」・「沼津型」も燕形銚頭と同様, 主にマグロ用に使われたと考えた。それに対して, 青森以北に分布する「一王寺型」が海獣用であるとした(註26の文献)。

津軽海峡に臨む北海道戸井貝塚では, 縄紋時代後期初頭の層から型式Ⅰの銚頭38点とともに, オットセイやアシカ・トドなどの海獣類の骨が200頭分以上出土した(参考図5: 北海道亀田郡戸井町教育委員会 1993『戸井貝塚Ⅲ』, 西本豊弘 1993「海獣狩猟から見た津軽海峡の文化交流」『古代文化』第45巻第4号, 23-9頁)。型式Ⅰの銚頭(「一王寺型」)の用途については渡辺の説を一部補強するようにみえるが, むしろその中の型式Ⅰ2(「船舶型」)を, 海獣狩猟用とみたほうがいいかもしれない(図5及び参考図5)。

なお, 近年考古学に応用されだした, 「動物の炭素並びに窒素の同位体組織は摂食・同化過程を通じて多少の修飾を受けるものの, 最終的には餌の同位体組織で決まってくる」という原理に立った, 「安定同位体による食性分析」が実施された北黄金(縄紋前期), 高砂(縄紋晩期), 有珠(続縄紋恵山期), 近世アイヌなど北海道噴火湾沿いの貝塚出土の古人骨は, 一貫して海獣・大型魚類を主食としていたことを示した(南川雅男 1989「安定同位体による食生態研究」『モンゴロイド』No.1, 14-6頁, 同 1990「アイソトープ食性解析からみる先史モンゴロイドの食生態」『モンゴロイド』No.6, 24-9頁)。

- 52) 洞穴・岩陰遺跡の良好な資料が得られれば, とりあえず銚頭の地域的な変遷の様相をある程度知ることができる。擦紋期の層から熊の頭骨7個の集骨が見つかって注目された北海道羅臼町のオタフク岩窟遺跡が良い例で, 続縄紋文化期からアイヌ文化期にいたる多数の遺物が出土した。銚頭も続縄紋文化期・オホーツク文化期(第7層)から4点, トビニタイ文化期(第5層)から4点, 擦紋文化期(第4

層)から7点, アイヌ文化期(第3層)から13点, 同期(第2層)から5点, 計33点出土し, 道東部の縄紋期以降の銚頭の変遷に関する重要な情報を提供した。

西本豊弘は, 索溝・索孔, 索孔の数と位置, 鏃の装着の有無, 尾部の形態を指標として, これらを5タイプに分類している(参考図6: 西本豊弘・他 1991「オタフク岩洞窟出土の骨角器」『オタフク岩遺跡』羅臼町教育委員会, 羅臼町文化財報告14, 222-46頁)。

続縄紋文化期・オホーツク文化期・トビニタイ文化期の8点はすべて佐藤の型式I(あるいは大塚和義の「抉入離頭銚」)に属する。しかし, 素材は鹿角よりも海獣骨や鯨骨が多くなっている。この縄紋早期末以来の伝統を有する銚頭は, 第4層で2点, 第3層でも1点出ている。

53) 長谷部言人 1926「本輪西貝塚の鹿角製銚頭」『人類学雑誌』第41巻第10号, 1-5頁。佐藤は長谷部のここでの分類に批判的であった。

54) 『ドルメン』第2巻第2号(1933)及び『日本遠古之文化』補註付・新版(1939)の補註44を参照。

続縄紋文化はその後千代肇によって, 本輪西上層式, 尾白内式, 恵山式の土器を指標とする前期, 江別式土器の中期, 北大式土器の後期の三期に編年された(千代肇 1965「北海道の続縄文文化と編年について」『北海道考古学』第1輯, 19-38頁。大場利夫・千代肇 1966「1 北海道」『弥生時代』日本の考古学Ⅲ, 河出書房新社, 378-91頁)。

55) 続縄紋文化の代名詞として恵山式が用いられるようになったのは, 佐藤の「我が国に於ける回転式銚頭について」が提出された同じ年, 1953年に出版された千代肇の『北海道南部に於ける遺跡及び遺物の考古学的研究』において, 恵山式の型式名が最初に用いられて以降のようである(同上)。

56) 続縄紋文化期の型式Ⅱを渡辺誠は「燕形銚頭」の範疇で捉え, 本州から伝播してきたものと見做した(前掲『縄文時代の漁業』196頁)。

木村英明も続縄紋文化の回転式銚頭を「饑」の有無と数, 「尾部」が双尾か単尾かなどを基準にして細別しているが, 大別は「茎孔式」(閉高式)と「茎槽式」(開高式)の同じく二大別である。木村によれば, 当該期は前期と後期に二分され, 前期に見られた種類の豊富さ, 装飾の豊かさが後期にいたって失われ, 「茎槽式」が主体を占めるようになるという(木村英明 1982「骨角器」『縄文文化の研究』6, 雄山閣, 143-65頁)。

木村の分類に沿って, 大島直行は「恵山式銚頭」を, 「茎孔式単尾銚頭(石銚装着タイプ・銚先鏃装着タイプ・尖頭部削り出しタイプ)」、「茎孔式双尾銚頭(石銚装着タイプ・尖頭部削り出しタイプ)」、「挿入式銚頭」(有茎式)、「茎槽式銚頭」の4型式に分類した(大島直行 1988「北海道続縄文の漁撈具—恵山式銚頭について—」『考古学ジャーナル』295, 13-6頁)。こうしてみると, 恵山期の銚頭のあり方が特殊で異常な発展であったことがよくわかる。

57) ただし, 室蘭市祝津遺跡出土例に限り, 恵山期のものでありながら索孔の位置が90度ずれて, 縄紋晩期のものと同様に抵抗面に平行しているそうである(木村, 同上)。

58) 大変特徴的な形態の銚頭であるにもかかわらず, その後これを指摘する研究者がいない。佐藤の提示した例を含めて, 再検討の必要がある。

しかし, 当該期に折衷型が確かに存在する。渡辺は「燕形離頭銚頭」の要素(索孔・閉高式・饑の発達)と「抉入離頭銚」の要素(尾部の形態・饑の位置)を合わせ持つ折衷型を「恵山型離頭銚頭」と呼んでいる。その特徴は開高式の「抉入離頭銚」を二個腹面において接合して閉高式にしたような形態になると言う(前掲『縄文時代の漁業』197-201頁)。

この「茎孔式双尾銚頭」は恵山貝塚や豊浦町礼文華貝塚から比較的まとまって出土している。礼文華貝塚では17点出土したが, そのうち10点は墓に一括副葬されたものである。佐藤が本輪西貝塚例(図7-7, 8)で挙げていた「茎孔式単尾銚頭」の方は恵山期の銚頭を代表する型式とされていたが, 出土例は意外に少なかった。しかし最近伊達市有珠10遺跡から20数点出土して, この型式も一般的であったことがわかってきた。

こうした新しい資料状況を受けて大島は、石銚装着タイプ（Eタイプ）、銚先鏃装着タイプ（Uタイプ）、尖頭部削り出しタイプ（Mタイプ）の頭部形態の差異に注目し、「東北地方縄文後・晩期の燕形離頭銚頭の影響を受けまず最初にMおよびUタイプの単尾銚頭が出現し、それがEタイプに継承され、きわめて安定した形式として発展してゆく」と、より具体的な説明をしている（参考図7：大島直行 1988「統縄文時代恵山式銚頭の系譜」『季刊考古学』第25号、26-30頁）。

59) 前掲『東アジアの先史文化と日本』357頁。

60) 同上、357-8頁。

現在、三浦半島の洞穴遺跡からは10点の回転式離頭銚頭が知られているという。内訳は雨崎洞穴1点、大浦山洞穴3点、間口A洞穴4点、毘沙門B洞穴1点、海外洞穴1点である（神澤勇一 1988「三浦半島の弥生時代漁具」『季刊考古学』第25号、41-4頁）。しかし理由はわからないが、ここには佐藤が言及しているのまた洞穴と毘沙門C洞穴例は入れられていない。

ところで最近、神奈川県池子遺跡群 No.1-A 地点（旧河道）からも固定式銚頭とともにⅡb1型の回転式離頭銚頭の出土が報じられた。弥生時代中期後半である（『発掘された日本列島'96 新発見考古速報一』朝日新聞社）。この発見によって、海岸から離れた集落遺跡と海蝕洞穴遺跡間の居住形態論、あるいは海蝕洞穴遺跡の利用形態論が問題となってこよう。

弥生時代の回転式離頭銚頭は他にも、福島県薄磯貝塚の中期前葉から4点出土している（大竹憲治 1985「東北地方南部出土の弥生時代骨角製品」『古代文化』第37巻第5号、42-6頁。同 1988「いわき地方の釣針と銚」『季刊考古学』第25号、31-5頁）。

1996年11月9日に三重県の「海の博物館」で鳥羽市白浜貝塚の展示出土品を見ていてびっくりした。骨製のⅡb1型の回転式離頭銚頭が存在するのである。なお、索孔以外に刃溝の直下に鏃の固定用といわれている孔が開けられている。遺跡の年代は弥生中期以降となっている。銚頭が弥生中期のものだとすると、最も南の分布であるだけでなく、索孔の位置が縄紋のものと同じで、弥生の通常の例とは90度づれることになり、系統問題が複雑になろう（この後、山浦清がこの銚頭についてすでに言及していることに気がついた。註29掲載の1996年論文）。

61) 弥生文化における縄紋文化の終末以降の伝統的生活形態としては、南関東の海蝕洞穴に窺える漁撈活動ばかりでなく、北関東・中部高地・南東北などの山地帯の洞穴遺跡に窺える狩猟活動が目される（山内利秋 1995「洞穴遺跡の利用形態と機能的変遷—長野県湯倉洞穴遺跡を例として—」『先史考古学論集』第4集、63-98頁。安齋正人 1995「洞穴・岩陰遺跡の土俗考古学的再検討」同上、99-102頁）。

62) 註43参照。

63) 佐藤の型式Ⅰに相当する銚頭を、すでに何度も言及しているように、大塚和義は「挟入離頭銚」と呼び、その特徴を、「全体的に柳葉形を呈し、先端部・索溝（背面には茎漕）・尾部の三つの部分から成っている。先端は鋭く造り出され、その横断面は楕円もしくは三角形の形態をとる。尾部もおもに尖っている」と記している。大塚は「挟入離頭銚」を、Ⅰ期：縄紋前期から後期、Ⅱ期：縄紋晩期から統縄紋、Ⅲ期：土師器・捺文土器・オホーツク土器をともなう最盛期、Ⅳ期：捺文土器・オホーツク土器後半期、Ⅴ期：捺文土器・オホーツク土器終末期、Ⅵ期：近世アイヌ以前、の6期に区分する編年案を提示した（註39掲載文献）。

64) 佐藤が大学院特別奨励学生前期論文を提出した2年後の1955年に、大場利夫が「モヨロ貝塚の骨角器」を発表した。資料は1941年から翌年にわたって行われた、遺跡の一部である網走川左岸北地域の開鑿工事の際に採集されたものを中心に、一部1947年の調査資料を加えたものである。ここで大場は回転式銚頭を概略、扁平・単尾・閉高・前後面索孔・嵌入溝のA型、肥厚・双尾・閉高・側面索孔・嵌入溝のB型、扁平・開高・索溝のC型、扁平円錐形・索孔・閉高あるいは開高のD型、の4型式に分けた（大場利夫 1955「モヨロ貝塚の骨角器」『北方文化研究報告』第10輯、173-249頁）。前後面の認定が佐藤の抵抗面と一部異なるため、索孔の位置関係も異なるものもある。例えば、A型とした資料K. 20は佐藤

のⅢb2 (図版14-3), B型としたK. 27はIVb3 (図版20-2), D型としたK. 40はIVax1 (図版24-2) といった具合である。

前田潮も1974年の論文でオホーツク文化の回転式銚頭の型式分類を試みている。佐藤の体系的な分類案を知らなかったため、オホーツク文化全体を見渡した最初のカテゴリ分け作業であると思っていたようである。佐藤の型式Ⅰに当たるものを、A群とB群に二分し、後者が索孔を2つ有する特徴を、「これは銚縄の連結が中柄着部から分離したことを意味する」と、系統論上・機能論上において注目される指摘をしている。型式ⅢbはC群に一致する。型式ⅣaがE群で、型式ⅣbがD群である(参考図8: 前田潮

1987「オホーツク文化とそれ以降の回転式銚頭の型式とその変遷」『北方狩猟民の考古学』同成社、65-114頁)。分類基準の取り方が違っているが、両者の分類結果はほぼ一致する。

なお、1964年に東京大学文学部から刊行された『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻に掲載された「オホーツク遺物の特色」において、佐藤はモヨロ貝塚出土の銚頭20点を、「有鉤銚頭」と「回転銚頭」に分け、後者を第一類「有溝型」、第二類「有窩・左右索孔型」、第三類「有窩・背腹索孔型」の3類に分け、「第二類は縄紋文化の燕形銚頭の系統を引くものと考えられる。第三類はそれに続く時代の銚頭の一種と関連があろう。ただし索孔の方向その他に変化がある」と、その系統観を簡単に説明している(前掲『日本の先史文化』324-5頁)。

65) 前田潮が描く各群の分布と地域差も佐藤の枠を出てはいない(前掲『北方狩猟民の考古学』75-9頁)。

66) 前掲『東アジアの先史文化と日本』358頁。

67) サハリンの回転式銚頭はP. B. チェバローヴァによって8型式に分類されている。

「第Ⅰ～Ⅴ型式は閉窩式、第Ⅵ～Ⅷ型式は開窩式である。第Ⅰ型式は単尾形で、嵌入溝を有し、索孔は1つ。第Ⅱ型式は双尾形で、嵌入溝を有し、索孔は2つ。第Ⅲ型式は双尾形で、嵌入溝はなく先端は尖っていて、索孔は2つ。第Ⅳ型式は双尾形で、嵌入溝を有し、索孔はⅠ～Ⅲが前面より後面へ貫通するのに対し、これは側面を両側に貫通している。第Ⅴ型式は、Ⅰ、Ⅱに近く、双尾形で、嵌入溝を有し、索孔は2つあるが、アゲを有し、また先端部に鉤孔を有する。第Ⅵ型式は、単尾ないし双尾(というより、基部が三角形か半円形に決られている)で、嵌入溝を欠き、先端は尖っている。索孔は縦に2つあり、また胴部の両側に抉りがある。第Ⅶ型式第Ⅵ型式とほとんど同じであるが、索孔を欠く点が異なっている。第Ⅷ型式は基部に結節を有し、索孔が結節のやや上に1つあり、嵌入溝を有し、アゲが両側にある」(前掲『東北アジア古代文化の研究』17-8頁)。チェバローヴァの並列的カテゴリー分けが系統分類の体裁をなさないことは、言うまでもないことである。

68) 前掲『東アジアの先史文化と日本』358-9頁。このような指摘は、後年の「ナイフ形石器の編年的一考察」における、終末期ナイフ形石器の「基部裏面の加工」の指摘を彷彿とさせる。

69) エスキモー文化とオホーツク文化の骨角器の類似は、エスキモー文化がコリャーク地方に波及し、古コリャーク文化に採り入れられた上での南下と考えている菊地俊彦の近年の研究によれば、北千島に「オホーツク文化」と称されるような文化複合は存在せず、オホーツク文化の遺物とよく似ていることから「オホーツク文化」とみなされてきた遺物群は、コリャーク地方からの文化的影響を受けた原住民(おそらくカムチャダール)の文化に、北海道からオホーツク文化が進出した結果、そこに混在して残された遺物群である。この「閉窩式で単尾形、索孔を有し、嵌入溝を欠く」銚頭も古コリャーク文化に求めることができそうである(前掲書第Ⅲ部第1章「北千島の「オホーツク文化」」)。

70) 前掲『東アジアの先史文化と日本』359-60頁。註64も参照。

71) 同上、360-1頁。

72) 擦紋土器という言葉は、1932(昭和7)年に河野広道が最初に用いた語である(河野広道 1932「胆振国千歳村火山灰下の竪穴遺跡」『人類学雑誌』第47巻第5号、165-77頁)。その後の長い研究空白を置いて、1962年に名取武光と峰山巖がアヨロ遺跡の土器を二分したのが擦紋土器の編年の始まりであった。佐藤達夫は1964年に4期区分に触れ、更に東京大学文学部考古学研究室による常呂での発掘調査の報告

書『常呂』の中で、5期区分説を展開した（「附・モヨロ貝塚の縄文、続縄文及び擦文土器について」と「擦文土器の変遷」前掲『日本の先史文化』261-70と285-316頁）。なお佐藤は今日の通説とは逆に、擦文土器を旧く、オホーツク土器を新しく考えていた。

擦文文化期の銚頭については、開高式のものに限られるが、「アイヌ文化」のものとともに宇田川洋が集成して、その変遷試案を提出している（参考図9：宇田川 洋 1987「北方地域における開高式銚頭について（1）」『北海道考古学』第23輯、45-58頁）。なお、宇田川はそこで佐藤の論文に触れ、「北海道の擦文文化、オホーツク文化に続くプロト・アイヌ期に注目したのは卓見である。当時、擦文文化に属する銚頭は不明であり、それについては触れられておらず、オホーツク文化のものがプロト・アイヌ期、そしてアイヌ期のものに連続することを指摘している」と評した。しかし、この後の本文でも指摘するように、佐藤の意はもう少し違うところにあった、と私は解釈している。

先に言及したオタフク洞窟では擦文文化期の第4層から銚頭が7点出ている（参考図6、註52掲載文献）。佐藤の分類によれば、型式Iが2点、IVax1が1点、IVax3が3点、不明1点という内訳になる。IVax3例は3点とも距（尾部）が三叉に別れていて、佐藤の図版には見ない新例である。型式Iではあるが、同時期の3尾の銚頭は奥尻島青苗貝塚から多く出ている（同上、宇田川論文）。

- 73) 「プレ・アイヌ」という語は、本来は明治期の「日本人種起源論」におけるアイヌ説と非アイヌ説の対立の構図の中で、モースのプレ・アイヌ説として意味を持っていた。言うまでもないことであるが、佐藤の用語法からは人種論は払拭されている。

埴原和郎・藤本英夫・浅井亨・吉崎昌一・河野本道・乳井洋一による1971年のシンポジウムにおいては、「プレアイヌ」「プロトアイヌ」「アイヌ」「アイノイド」という語を、おおよそ続縄文文化まで、擦文文化、鎌倉・室町から江戸時代にかけて、江戸末から明治にかけての、それぞれの時期に対応させている（埴原和郎・他 1972『シンポジウム アイヌ—その起源と文化形成—』北海道大学図書刊行会）。

本州の中世・近世に相当する北海道の空白部分を、「アイヌ考古学」という用語を使って考古学的に説明しようとしている宇田川洋は、擦文時代の終焉後から18世紀末ころの「アイヌ文化」を「原アイヌ文化」と、その後現代につながる変質したあるいは変質せしめられた「アイヌ文化」を「新アイヌ文化」と仮称している（宇田川 洋 1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター）。

- 74) 前掲『東アジアの先史文化と日本』361頁。
75) 前田潮の分類ではF1とF2にほぼ相当する。ただし前田はF類が鹿角製で円錐形であるところから、擦文文化からの系統を考えている（註64掲載論文）。

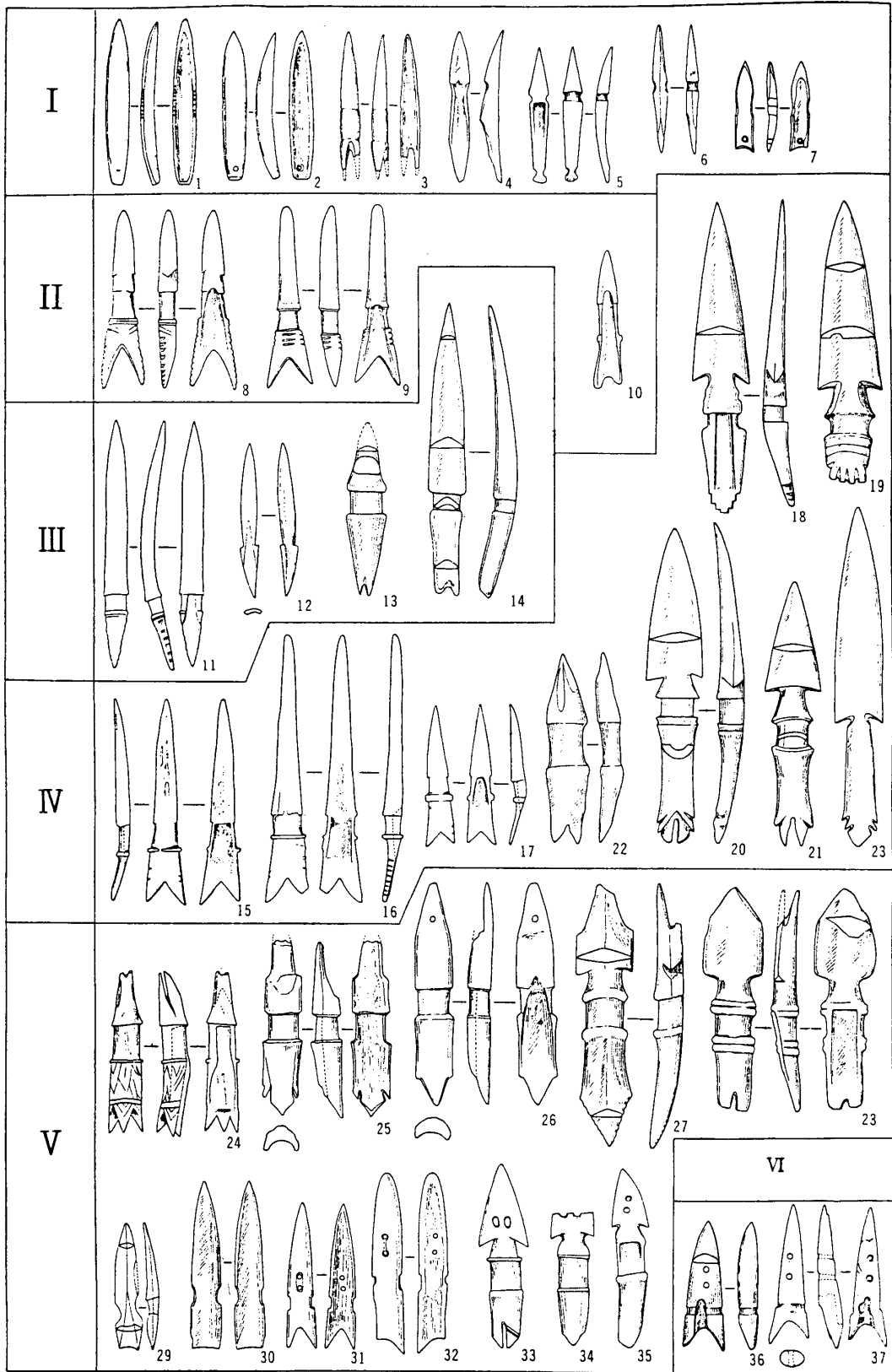
オタフク岩洞窟ではアイヌ文化期とされる第3層から銚頭が13点出ている（参考図6、註52掲載文献）が、やはりIVax1とIVax3が主体である。

- 76) 「樺太出土の型式IVa3の一例（図版18-4）に形態の類似が求められるものの、本例の所属年代は単にオホーツク式と報ぜられる以外確かな所は解らない」（前掲『東アジアの先史文化と日本』361頁）。
77) オタフク岩洞窟第3層出土の西本豊弘がタイプVとした1点が、当例に類似する（註52掲載文献）。
78) 前掲『東アジアの先史文化と日本』362頁。註68も参照されたい。
79) 前掲『東アジアの先史文化と日本』366頁。

佐藤が「発生的親縁関係」と呼んだ、第II群型式IIIとIVの系統が残された大きな問題である。

1980年前後に北西太平洋沿岸地域の回転式銚頭についての論考を集中的に発表していた山浦清（1979「ベーリング海峡周辺における回転式銚頭の発展過程について」『考古学雑誌』第64巻第4号、23-50頁。1980「北西太平洋沿岸地域における回転式銚頭の系統問題」『物質文化』35、1-19頁）が、最近再び地域とテーマを絞ってこの問題に取り組み始めている（山浦 清 1993「環オホーツク海文化」という視点—銚頭の分析から—」『北海道考古学』第29輯、9-20頁）。今後の成果を期待したい。

回転式鋇頭の系統分類——佐藤達夫の業績に基づいて——

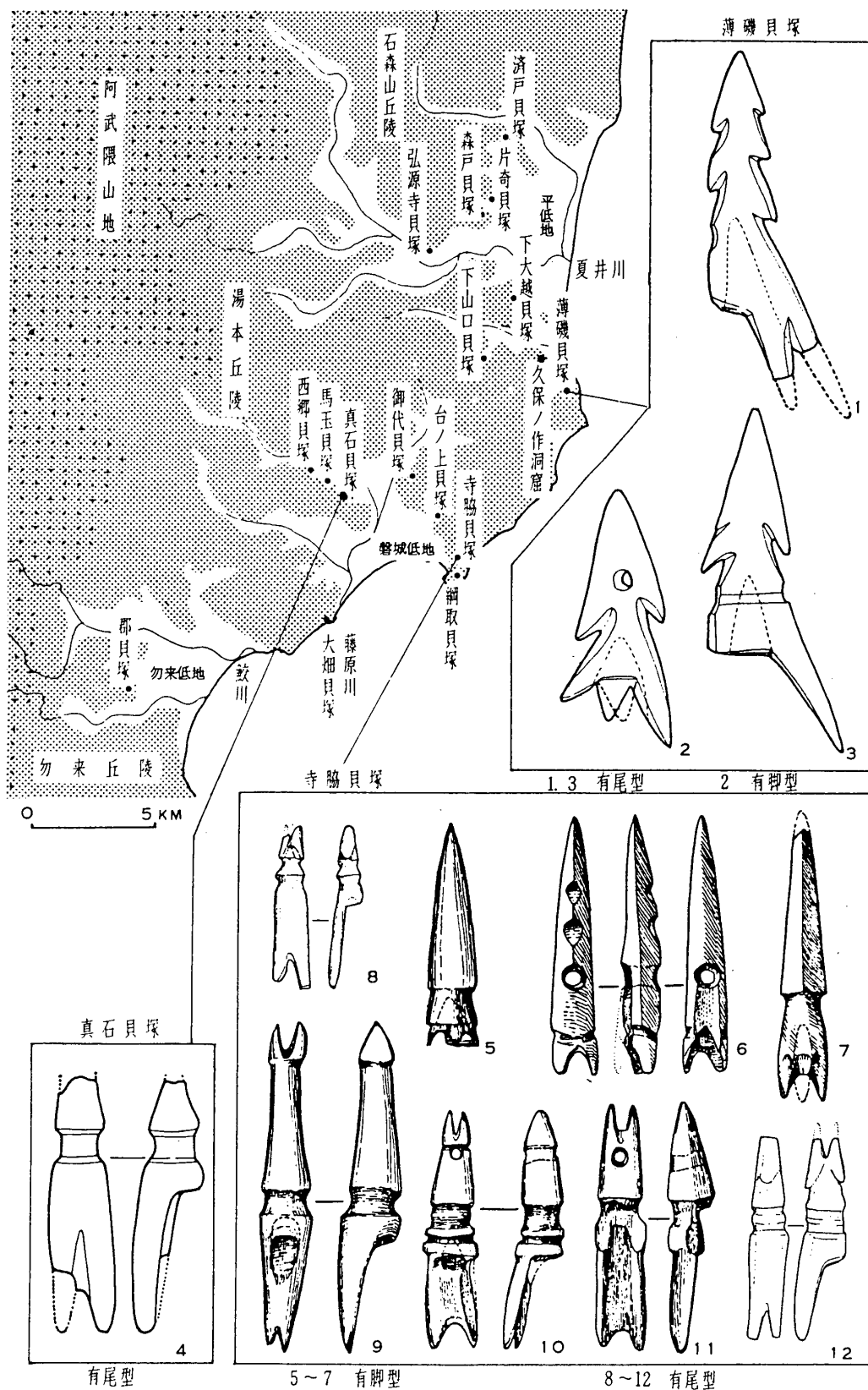


参考図1 大塚和義による「抉入離頭鋇」の編年(大塚 1966から転載)

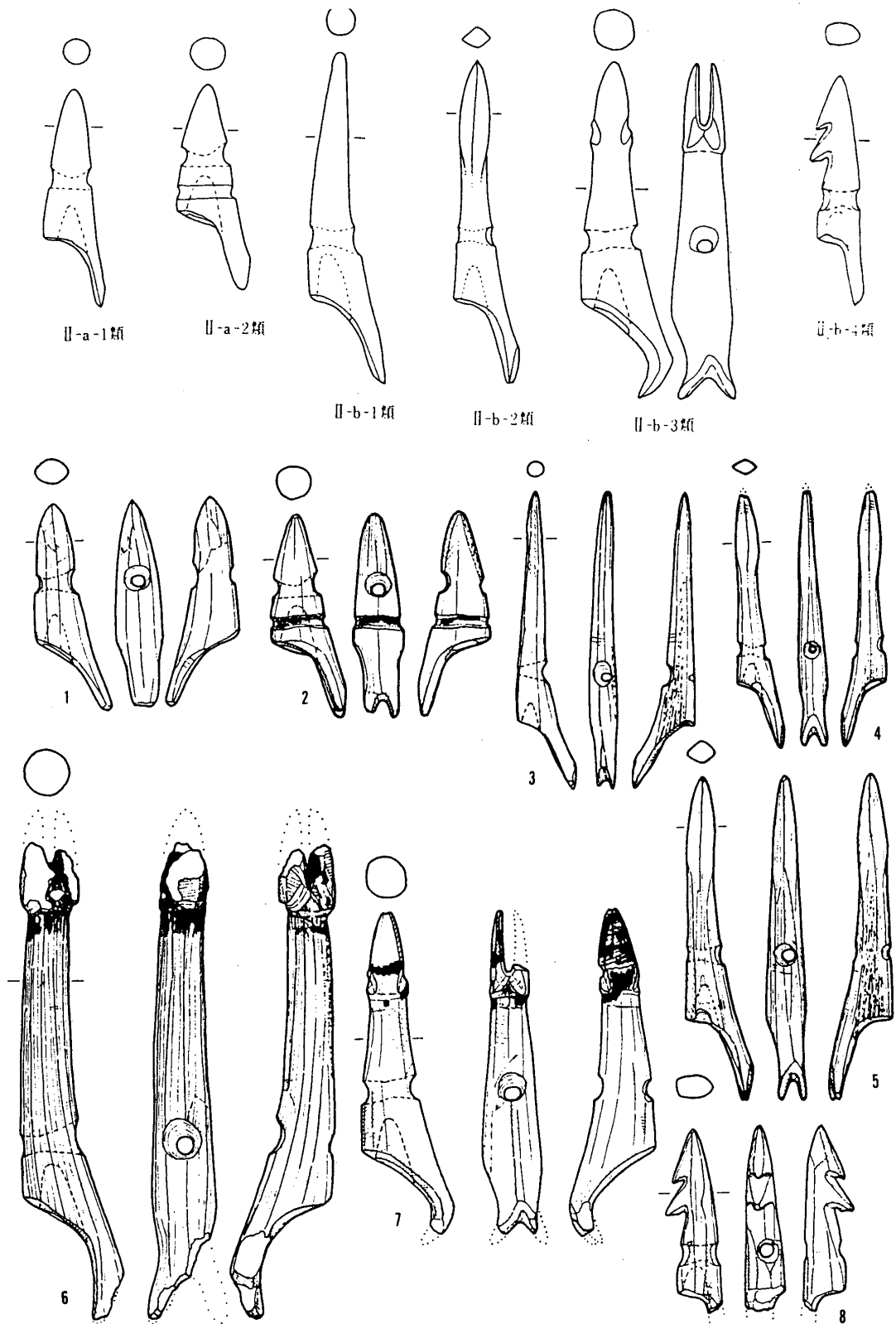
大木3・5式期		1 大木開貝塚 2 川下礮貝塚
大木8b式期		3 仁斗田貝塚
堀之内II式期		4 貝鳥貝塚
宝ヶ峰式期		5 宝ヶ峰貝塚 6 峰貝塚
粘瘤土器期(前半)		7 西の浜貝塚 8 西の浜貝塚 9 台開貝塚 10 西の浜貝塚 11 台開貝塚
粘瘤土器期(後半)		12 台開貝塚 13 台開貝塚 14 西の浜貝塚 15 西の浜貝塚 16 泉澤貝塚 17 大洞C地点 18 大洞C地点
大洞B式期		19 大洞B地点 20 大洞B地点 21 大洞B地点 22 大洞B地点 23 大洞B地点 24 大洞B地点
大洞B-C式期		25 浦島貝塚 26 浦島貝塚 27 浦島貝塚 28 浦島貝塚 29 浦島貝塚
大洞C1式期		30 大洞C地点 31 大洞C地点 32 大洞C地点 33 大洞C地点 34 大洞C地点 35 大洞C地点 36 大洞C地点
大洞C2式期		37 大洞C2地点 38 大洞C2地点
大洞C2A式期		39 大洞C2A地点 40 大洞C2A地点 41 大洞C2A地点 42 大洞C2A地点 43 沼津貝塚 44 大洞C2A地点

参考図2 馬目順一による「閉窩式鋳頭」の変遷案(馬目 1983から転載)

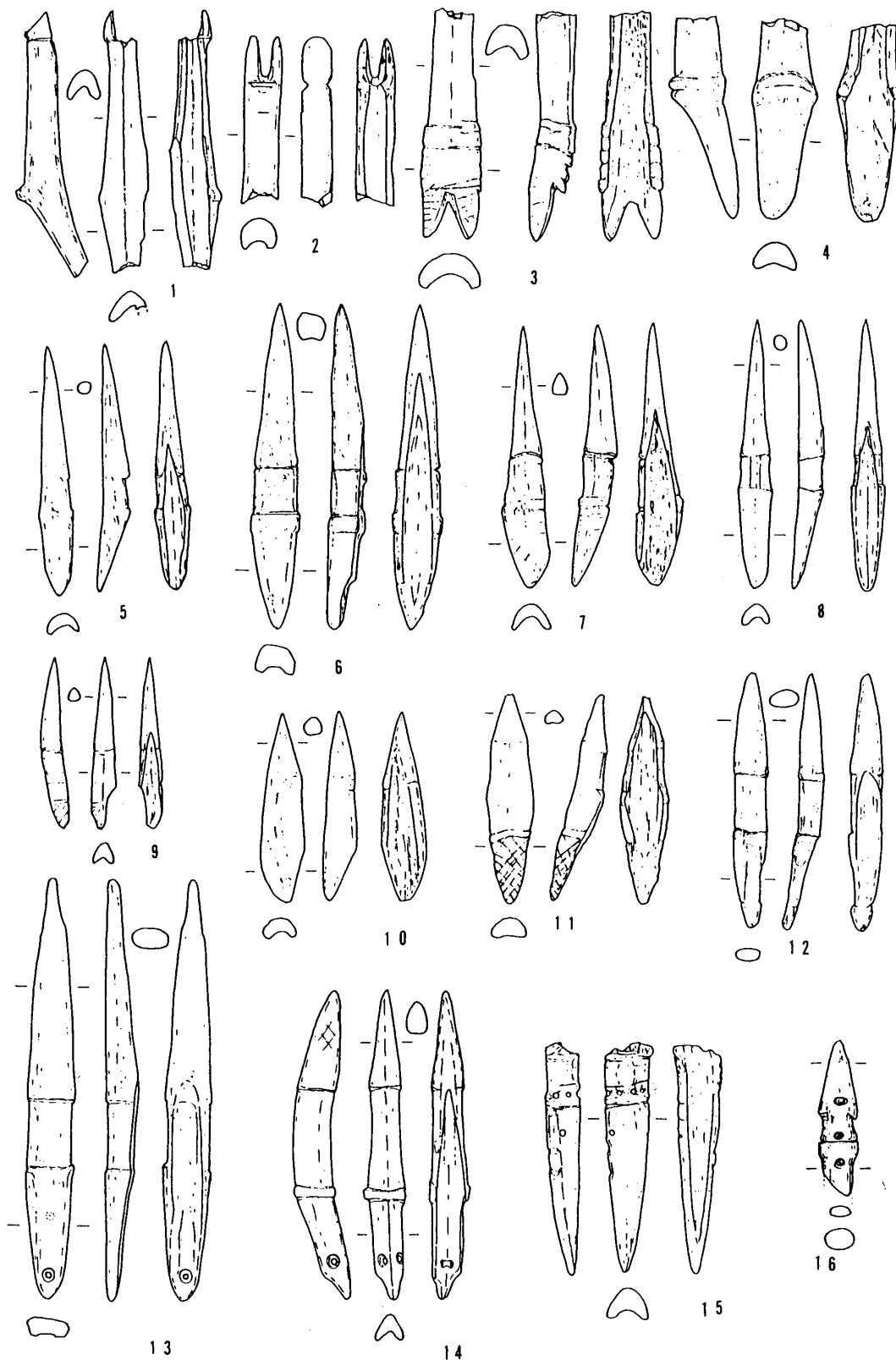
回転式鋇頭の系統分類——佐藤達夫の業績に基づいて——



参考図3 福島県いわき地方の回転式鋇頭（『薄磯貝塚』1980から転載）

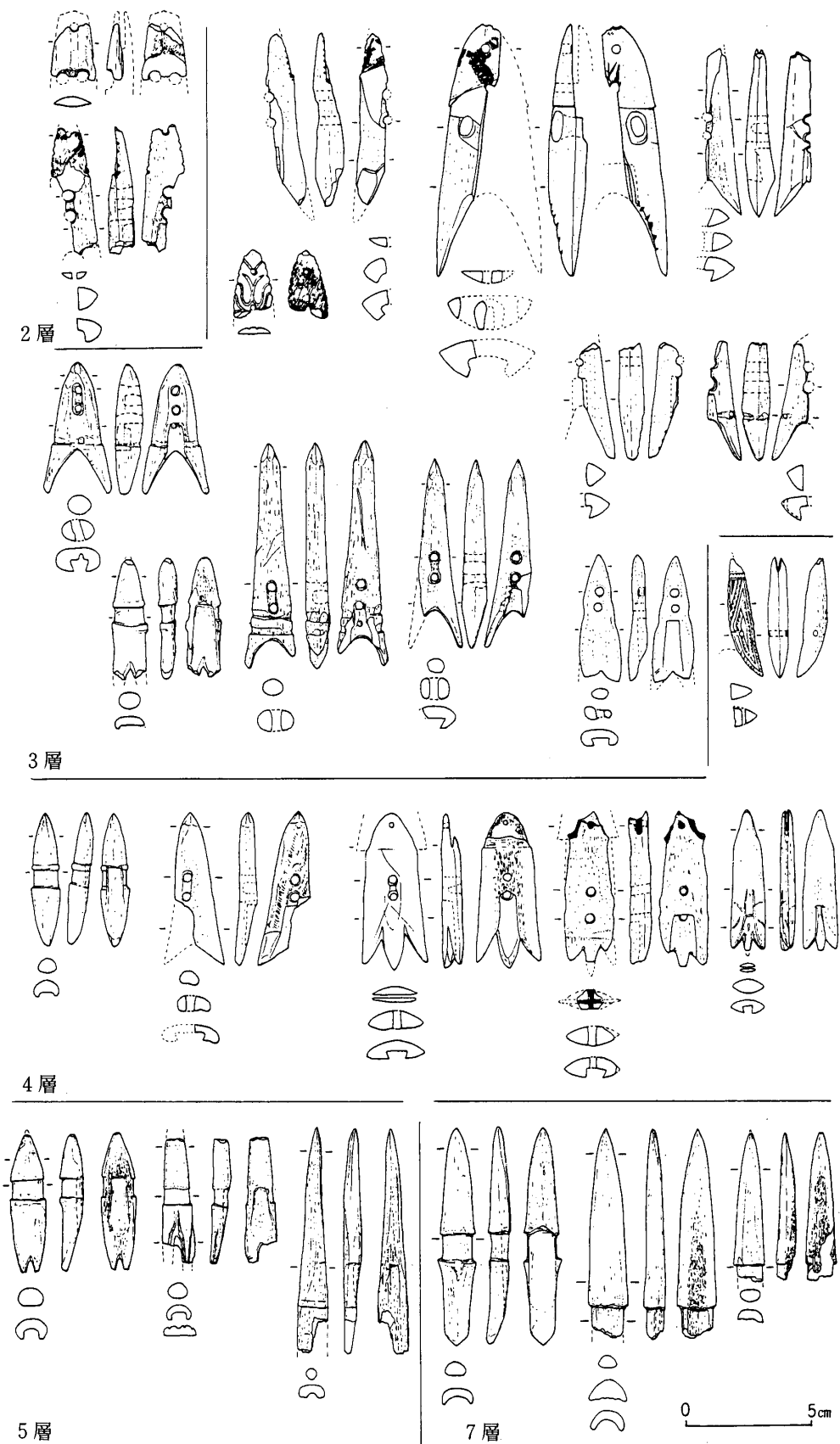


参考図4 宮城県田柄貝塚出土の「燕形鈹頭」 $\frac{2}{3}$ (報告書による)



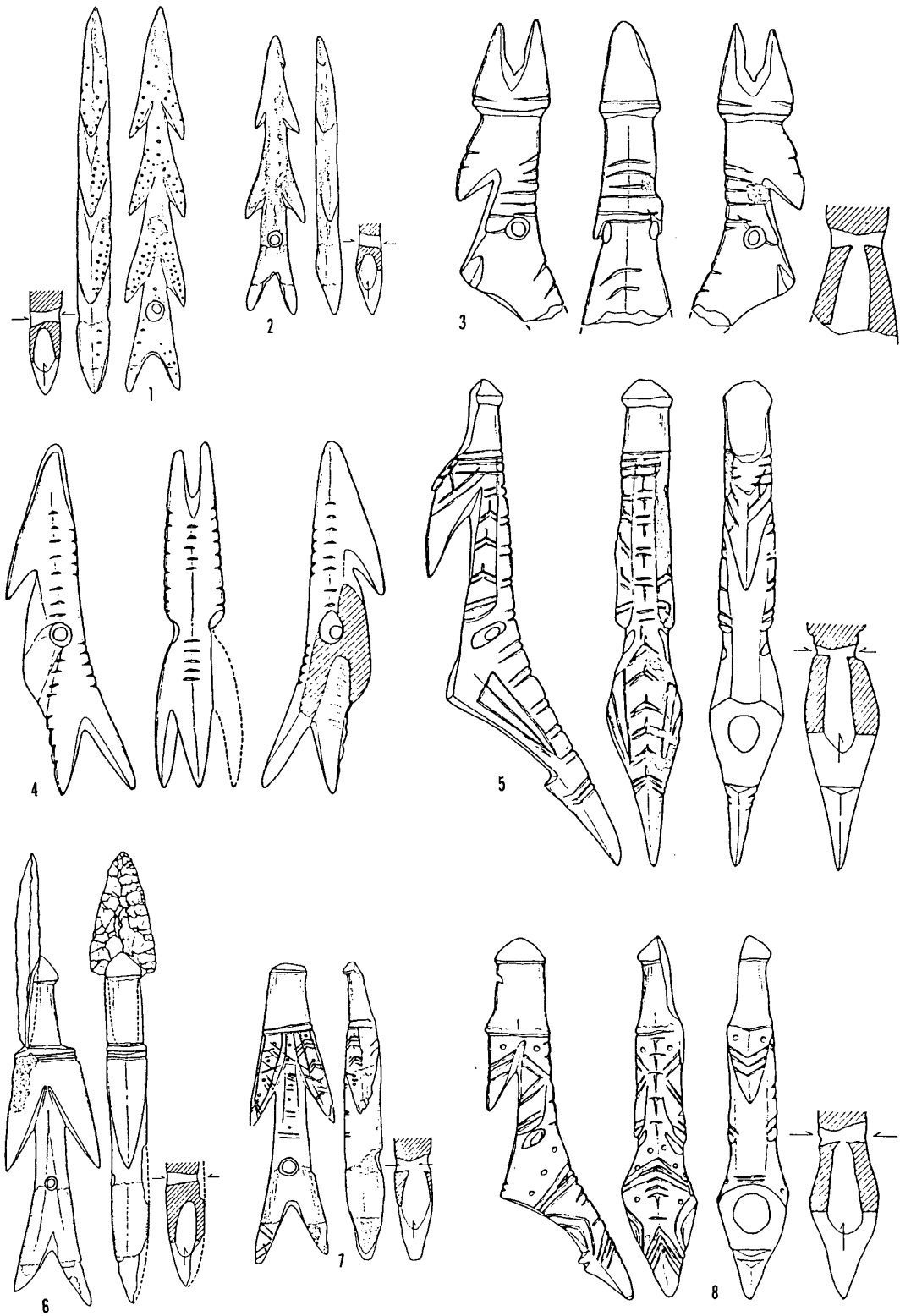
参考図5 北海道戸井貝塚出土の型式Iの鋇頭 ⅓ (報告書による)
 1-4. は型式I2 (「船泊型」)

安齋正人

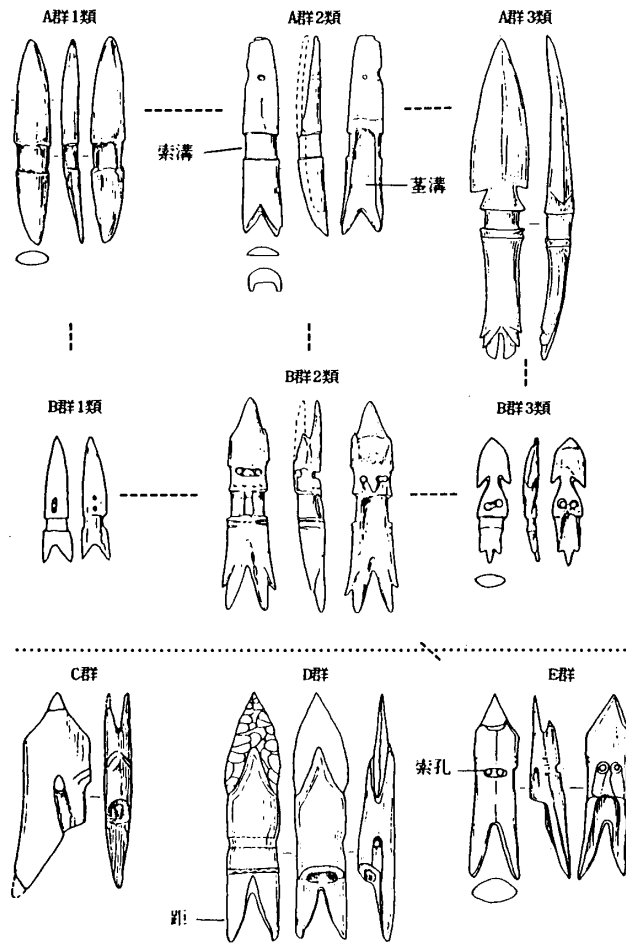


参考図6 北海道オタフク岩洞穴出土の銚頭 (報告書から転載)

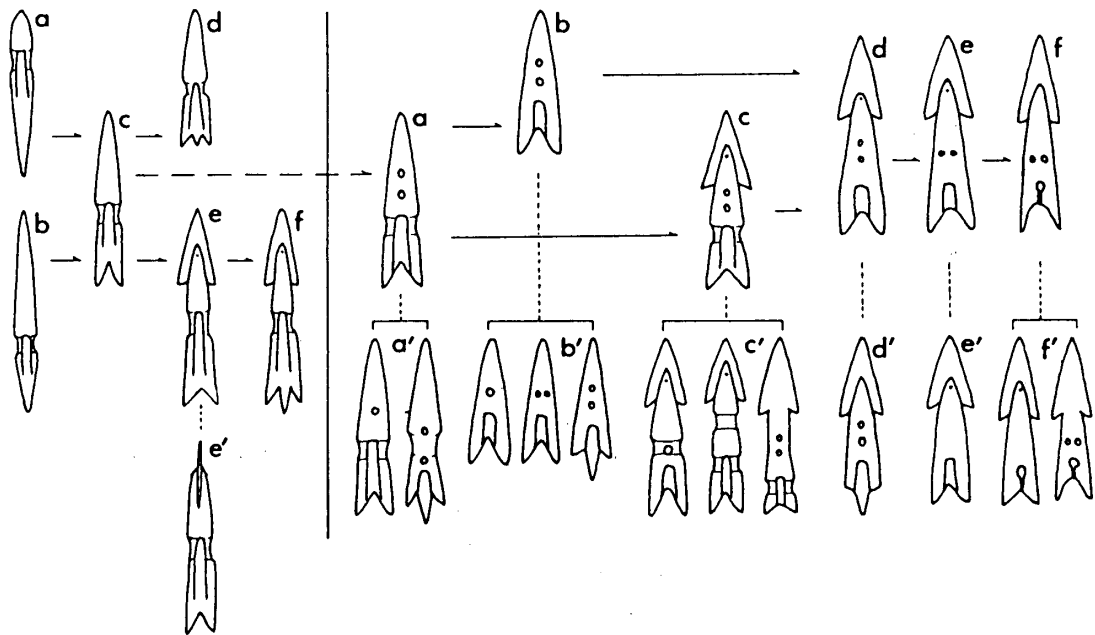
回転式鋤頭の系統分類——佐藤達夫の業績に基づいて——



参考図7 大島直行による「恵山式鋤頭」の分類 Ⅲ (大島 1988による)
 1, 2. Mタイプ 3, 4. Uタイプ 5-8. Eタイプ



参考図8 前田潮によるオホホック文化期鉞頭の種類 (宇田川 1988から転載)



参考図9 宇田川洋による擦紋文化期・アイヌ文化期鉞頭の変遷図 (宇田川 1987から転載)